

---

# ツキを見て泣いたヒト

.neko

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツキを見て泣いたヒト

### 【Nコード】

N0583Z

### 【作者名】

.neko

### 【あらすじ】

女神と魔王の伝説が伝わる大地ビルナード。そこを舞台として、魔王と鏡をめぐる一つの物語が幕を開く。

## 光

その人影は光を見ていた。

天から降り注ぐその光はとても美しかった。

暗闇に迷い込んだその人影に存在を与えてくれた。

だから、その人影は信じていた。

その光は自身にとって唯一の味方であると。

そして、その光は全てを忘れさせてくれると。

しかし、いつまで経っても、その願いが届くことはなかった。

あの日も光を見ていた。

暗闇へ進みながらも、しっかりとその瞳に焼き付けていた。

あの日に見た輝きが、今もその瞳に残り続けていた。

## 1 彼は魔王を追う

『リユートが私を護ってよ』

その声と同時に、暗闇の中に光が差し込んだ。

そして、その光は少年の存在を映し出した。

少年は光を見上げた。

光の中から一本の手が差し出されている。

少年はためらうことなく手を伸ばした。

そして、その二つの手が触れようとした。

### 情報の集う町パド

紙の潰れる音がした。

その音に気づき、少年は我に返る。温もりを感じるはずだったその手の中は、握り潰された一枚の紙がある。当然、温もりなどあるはずもない。

少年は周囲を見回す。それと同時に騒がしい雑音が聞こえ始める。そして、多くの人で溢れる賑やかな食堂が見えた。飲み慣れない酒を飲んだためか、いつの間にか少年は眠っていたようだった。

少年は立ち上がるとする。そのとき、少年の前で椅子の動く音がする。

「よお」

その”青年”は椅子に座り、笑いながら少年に声を掛けた。少年は椅子から立ち上がるのをやめ、その青年の顔を見る。

額にバンダナをしたその青年は、自信に満ち溢れた表情で少年を見ている。だが、当の少年はその顔に見覚えがない。

少年は眉をひそめる。それを見て、バンダナの青年が笑い出す。

「ははは、こんなところで居眠りをしていたんだ。今さら警戒なんてしなくてもいいだろう？　むしろ、見守ってやってたんだ。感謝して欲しいものだな」

青年の笑いが終わる前に、少年は席を立とうとする。

「そう急ぐなって、”リユート”」

一瞬、少年の動きが固まる。そして、その視線は再び青年へと向けられる。その青年の表情は、相変わらず自信で満たされている。

「まあ、座れよ。俺はミトンっていうんだ」

”リユート”と呼ばれた少年は椅子に座る。その間、その視線はずっとミトンに向けられていた。

「……どこかで会ったことはありませんか？」

「いや、これが初対面だ。名前は自警団の詰所で知った。十代後半、田舎っぽい服装、長剣持ち、ってこともな。で、ガイタ村へ行くんだろ？」

そう言いながら、ミトンはリユートの手に握られた紙を指差す。リユートは思わずその紙を見る。

確かに、リユートはその紙を受け取る際に、名前を秘密にするようにとは頼んでいなかった。そもそも、そんな情報を得ようとする人物がいるとは考えていなかった。こうなると、このミトンという

青年の”目的”も大方予想できる。

「そうですね。もしかして手伝ってくれる、ということですか？」  
「もちろんだ」

ミトンは力強い声で即答した。  
リユートはその手に握っていた紙を開く。そして、その文面を眺めた。

\*\*\*

最近になり、村に魔物が現れ始めました。  
勇敢なお方、どうか魔物を退治してください。  
報酬は村中から集めた一千万リンを用意してあります。  
よろしくお願いいたします。

ガイタ村一同

\*\*\*

不意に、リユートの手からその紙が抜き取られる。リユートが視線を前にやると、ミトンがその紙を見ていた。

「魔物が。最近、特にひどいもんだよな」

そう言って、ミトンはリユートを見る。  
ミトンの言う通り、最近になって”魔物”による被害が増え始めていた。その被害に怯え、この地方から去る者も現れている。魔物が現れ始めた三年前に比べると、明らかに状況は悪化していた。  
もちろん魔物に対抗する者達も現れている。

その筆頭は、この地方の首都バリプレートが誇る聖騎士団だ。そして、魔物退治の依頼を請け負う幾つかのギルドが続く。さらに、ごく少数ではあるが、リユートのように個人で依頼を受ける者も存在する。

ミトンの視線を受け、リユートは少し考え込む。しかし、考える一方で、特に断る理由はなかった。そもそも、リユートの”目的”は、魔物退治でもなければ、その結果として得られる報酬でもない。

「リユートです。よろしくお願いします」

その返事を聞き、ミトンにはやりとした笑みを浮かべる。そして、リユートの目の前に手を差し出した。リユートはその手を強く握った。

外へ出たところで、少し冷えた風が吹いた。

賑やかな食堂とは異なり、外を歩く人の数は少ない。街路を照らす灯りの数も少ない。しかし、その街路は少し明るく見えた。

ちょうどその日は満月だった。リユートは空に上がる月を見た。

「いい月だな」

ミトンはリユートの肩に手を置く。しかし、リユートはミトンの方を見ない。少し震えながら、月を見続けていた。そして、一言だけ呟いた。

「……魔王」

その瞬間、ミトンの眉が微かに動く。

「そういえば、満月かどうかまでは知らんが、”女神伝説”は月で始まる。こんな感じだったのかもしれんな」

ミトンも月を見上げた。

”悪い魔王が、女神の戦士によって退治される”。

女神伝説とは、そんな他愛のない昔話だ。それは古くから、このビルナード地方に残されている。世界各地に残される他の伝説と比べれば、実に子供じみた内容である。

しかし、不思議なことに、ビルナード地方の人々は、その伝説を実話であると信じている。さらに、歴史に残るいくつかの動乱を”魔王と女神の戦士による戦い”と呼んでいる。例えば、首都バリブレートの建国記には、千年前に魔王アティラスが現れたと記録されている。こんなことを学者といった知識人ですら信じている。実に変わった土地である。

7

「僕は、魔王を見つける」

リユートが漏らしたその言葉を聞き、ミトンは再びリユートを見る。無意識の言葉なのか、リユートは月を眺めたままである。

「絶対に、この手で……」

そのとき、リユートの顔が月明かりで光る。そして、その光を生み出した水滴は、パドの街路へと静かに落ちた。ミトンはそのリユートを黙って見つめた。

そして、少しの沈黙の後、ミトンが口を開いた。

「まだ”噂”だけだとしてもか？」



その声に気づき、リユートは我に戻る。そして、ミトンの方を見た。そのミトンの表情は、先ほどまでからは想像できないくらい真剣なものであった。

「すみません。僕は何か言いましたか？」

その問いに、ミトンは少しの間だけ沈黙する。その後、首を横に振りながら答える。

「いいや、何も言っていない。気にするな」

そう答えた後、ミトンは再びリユートの肩に手を置く。そして、月を見上げた。

「それにしても本当にいい月だ。どうだ、もう一軒だけ寄らないか？ 明日には魔物退治なんだ。その前に英気を養いたい。あの月の見える店だな」

そう言って、ミトンはリユートを連れて歩いた。

三年前。

魔物が現れると同時に、この地方に一つの噂が広まった。女神伝説の残るビルナードでは、それはごく自然な噂であった。

魔王。

その噂は伝説の枠を超えて、多くの人々を恐怖へと導いた。しかし、人の噂など無責任なもの。

姿を現さない魔王の噂など、年月と共に忘れ去られていった。

今ではその話をすれば、笑い者になるほどである。

しかし、それでも”その存在”を信じている者はいらる。  
そして、あてなく”その噂”を追う者もいる。

その姿は、まるで何かにすがっているかのようにも見えた。

## 2 ガイタ村と狼

### 狼の村ガイタ

その小さな村は静まり返っていた。

昼間だというのに、外を歩く人影は見つからない。いや、それどころか人の声すら聞こえない。事情を知らない人間であれば、廃村と勘違いしてもおかしくはないだろう。だが、事情を知っているその二人には、その光景が自然に思えた。

「どこも似たようなもんだな。魔物に怯えて外にすら出ない」

「そうですね」

「まったく。バリプレートは一体何をしているのだ」

そう言いながら、リユートとミトンは村の中へと入っていった。

二人が向かったのは長老の家である。

その家には広間があり、そのため他の民家と比べて一回り大きかった。おそらく、その広間は村の会議等で普段使われているのだろう。その広間にリユート達は案内された。

しばらく待っていると、七十歳を超えているであろう老人が入ってくる。ガイタ村の長老だ。威厳……とまではいかないが、老人ならではの落ち着いた雰囲気漂わせている。

長老は簡単な自己紹介の後、魔物についての話を始めた。

長老の話によれば、魔物が村へ出没する頻度は二、三日に一度。また、時刻は決まって夜ということらしい。さらに、その外見は、この地方に生息する小型の狼”キッズウルフ”のそれと同じという

ことだ。ただし、その獯猛さは明らかに異なっている、と付け加えられた。

「つまりは、”狼”退治ということか？」

説明を一通り聞いた後、ミトンは長老の目を見ながら尋ねた。

「そう考えることもできましょう。ですが、我々にとっては脅威なのです。先日、うっかり外に出た者が殺されてから、村はすっかり静まり返ってしまいました」

長老は力ない声で答える。

「余計な質問だったな。忘れてくれ。魔物退治の依頼なんて、どこもそんなものだからな。ただ、楽な仕事と思っただけだ」

そう言っつて、ミトンは視線を横にやった。そこには窓があり、その先には”魔物”が棲んでいると説明のあった山が見えた。それを見た後、ミトンは立ち上がる。それを見たりユートも同じく立ち上がる。

「ちよつとあの山の様子を見てくる。あと、もう少し気楽にしているといい」

そう言っつた後、ミトンは自信に溢れた笑みを長老に向けた。

「今後、魔物に怯える必要はなくなるんだからな」

目的の山は、ガイタ村からそう遠くは離れていない。ほんの一時間も歩けば到着できる距離だ。豊富な資源に恵まれているこの山は、ガイタ村の人々にとって生活の一部であった。そのため、整備された山道もある。

その山道に久方ぶりの人影が現れる。

「現れないな」

そう言っつてミトンは立ち止まる。そして、周囲を見渡した。隣を歩いてきたリユートも同じくその足を止めた。二人が山に入ってから、既に二時間が過ぎようとしている。しかし、魔物は姿を現さなかった。その気配すら感じられない。

「夜つて話ですし、昼間は隠れているのかもしれませんがね」

「夜という情報に根拠はないがな。別の場所だと、昼に現れた例だってある。いずれにしても、ここの魔物は随分と臆病なものだ。とはいえ、所詮はキツズウルフ。分からんでもないが」

その言葉を聞いて、リユートは小さく息を吐く。

「どうしたんだ？ 少し元気がないように見えるな」

「いえ。何でもありません」

リユートは首を横に振る。そして、そのまま先へ進もうとする。

「それにしても、”魔物”とは不思議なものだと思わないか？」

そのミトンの言葉に、リユートは足を止める。

「俺も魔物退治は何度か経験した。だが、どこへ行っても同じだった。凶暴化した獣が暴れているだけ。そうであれば、最初から”獣”と言えればいい。凶暴化したところで、その事実が変わるわけないのだからな。もちろん退治する者がいなくなるわけでもない」

「……たぶん、その凶暴化が問題なんですよ。あの村でもそう言っていましたし」

「そうだな。だが、それでも俺には理解できん。三年前の”噂”に未だ踊らされているようにも見える」

「……」

リユートは何も答えない。少しの間、ミトンはその様子を見る。

「とはいえ、多くの獣が凶暴化している。異常事態だということに間違いないか」

ミトンはそう言って先へ進もうとする。

そのとき、近くの茂みが揺れる。

リユートとミトンは、警戒しながらその茂みを見つめる。そこから現れたのはキッズウルフだった。見たところ、おかしな点はない。

「……一匹か」

ミトンは周囲を見渡す。

臆病な性格で知られるキッズウルフは群れで行動する。しかし、どうやら周囲に仲間はいないようだ。ミトンは、茂みから現れたキッズウルフに近づこうとする。それに反応したキッズウルフは、すぐに逃げ出した。そこに獰猛さはない。

「どうやら”魔物”ではなかったようだな」

リユートはその言葉に頷き、そして口を開いた。

「そろそろ僕は戻ります。これ以上は手掛かりもなさそうですし」「分かった。俺はもう少しここに残る」

ミトンの言葉の後、リユートは村へと足を進めた。

リユートの姿が見えなくなったことを確認し、ミトンは再び森を見渡す。先ほどの狼の気配はもう感じられない。森に残るのは、木々の奏でる音だけである。それは静寂と言ってもいいだろう。

ミトンは静かに瞳を閉じる。全身の神経を研ぎ澄ます。手掛かりはないとリユートは言った。しかし、ミトンの考えは異なっていた。

遭遇しない狼。

群れない臆病者。

静寂の森。

ミトンにとって、それら全てが不自然に思えた。そして、それはミトンに一つの推測を与えた。

「……これは想像以上だな」

そう呟いたミトンは、そのまま森の奥へと足を進めた。

## 狼の村ガイタ

村に戻ったリユートは長老の家にいた。

リユートは広間でじつと窓の外を見ている。見えるのは、”魔物

”の見つからなかった山である。そこへ長老がお茶を持って現れる。

「どうだったでしょうか？」

長老はそう言いながら、リュートにお茶を差し出す。それを受け取り、リュートは首を横に振る。それを見て、長老は落胆の表情を見せる。

「心配しなくてもいいですよ。村に現れたところを退治しますのでお気遣い、ありがとうございます。よろしくお願いします」

そう言いながらも、長老はまだ不安そうであった。

「あの、一つだけ教えてください」

「はい、何でしょうか？」

「どうして、魔物と呼ぶのですか？」

その質問を受け、長老は目を丸くする。そして、少し考え込んだ。

「そうですね。考えたこともありませんでした。世間に流された、と言つのが正しいかもしれませんが、その意味では、”魔物”ではなく、”狼”だったのかもしれない」

「そうですね……」

リュートはそれ以上を尋ねなかった。そして、再び窓の外に映る山を見つめた。

しばらくして、ミトンも村に戻ってきた。手掛かりは何もなかったということだ。二人はその日、長老の家で休むことにした。



その夜、狼の遠吠えが響いた。

### 3 プロローグは終わる

「……」

リユートは空を見上げていた。その先にあるのは月である。パドで見たときと変わらず、その月は明るい輝きを放っていた。

「そんなに月が好きか？」

いつの間にか隣にいたミトンが声を掛ける。

「気分を落ち着けていただけですよ」

「なるほど。心の準備は大切だからな。それで、聞いたんだろ？」

ミトンの問いにリユートは静かに頷く。

それと同時に、リユートの耳は、先ほど聞いた狼の遠吠えを思い出す。村長の話では、魔物が現れる日には、決まってこの遠吠えがあるという。

リユートは何気なく剣を抜く。

「気持ちを落ち着けているというより、猛る気持ちを抑えていたつてどこか。気合が入っているじゃないか」

「……」

そのときだった。

再び遠吠えが聞こえる。その声は大きい。こちらに近づいている証拠である。

リユート達は、適当な家の屋根に上る。そして、声の方角へと目を凝らした。まだ何もいない。

二人は静かに待った。緊張のためか、普段は存在すら忘れていた心臓の音がはつきりと聞こえる。これから始まる命の駆け引きまでのカウントダウンだ。

「来た」

ミトンは小声でそう言った。

リユートも大地を駆け回る一つの影を確認する。その影は次第に大きくなる。そして、月明かりの下、二人はその姿をはつきりと見た。長老から聞いていた通り、外見はこの地方に現れるキッズウルフのそれと同じである。しかし、その殺気は強い。屋根の上にながら、リユートは一瞬身震いする。

そのとき、リユートの隣で剣が鞘を走る音が聞こえる。息を呑み、魔物から目を離さないようにし、リユートも自身の剣に手をかけた。

「どっちが先だ？ たかだか狼一匹。二人だと逆に難しい。一応聞いておいてやるよ」

「僕が行きます」

リユートは剣を抜く。そして、屋根から飛び降り、魔物に向かって走り出した。

そのリユートに気づいた魔物は、逃げるどころかリユートに襲い掛かってくる。そして、二つの影が重なる。

その直後、一方の影が崩れ落ちた。

「やるもんだな」

そう言いながら、ミトンは崩れ落ちた影に近づく。そこには魔物が横たわっている。

「……まあ、詰めめ甘さはご愛嬌ってことにしておこうか」

次の瞬間、倒れていた魔物がミトンに飛び掛かる。だが、ミトンは動じない。ほらな、という表情で一瞬リユートの方を見る。そして、身体を反転させ、魔物を斬り付ける。それによつて魔物はその動きを止めた。

「俺も仕事をしとかないとな」

そう言いながら、ミトンは再びリユートの方を向く。リユートは黙ったままミトンの方へと歩く。そして、横たわった魔物を見た。動かなくなつたその姿は、もはやキッズウルフと区別がつかない。

「……」

リユートは剣についた血を静かに拭う。それは、この依頼の終わりを意味している。微かな空虚感が胸を走る。

結局、それは”魔物”ではなく、”獣”であつた。

「そろそろ行くぞ。俺に死体を眺める趣味はないんでな」

ミトンの声がする。その言葉の通りだ。この場所に留まつたところで、得られるものは何もない。リユートはミトンと共にその場を離れた。

魔物が討伐されたことを知ると、村人達は揃つて大歓声を上げた。夜中だというのにお祭り騒ぎ。大事に貯蔵していた食材を全て使い、村人達はご馳走を用意する。もちろん主役は二人の英雄だ。ミトンは相変わらずの態度。そして、リユートは少し慣れない感じで

祭りに参加した。

しかし、祭りが始まって間もなく、ミトンはその姿を消した。どこかで休憩をとっているのだろう。リユートはそう思った。しかし、朝になってもミトンが帰ってくることはなかった。

朝日の差し込む部屋。

リユートは窓の外を見る。昨日とは違い、人の姿がそこにはある。祭りの後片付け、中にはまだ祭り気分の人もある。退屈な片付けのはずなのだが、村人達の表情は明るかった。心なしか、リユートの表情が緩む。しかし、リユートはすぐにミトンのことを思い出す。出会う人々に尋ねてみた。しかし、昨夜以降、誰一人ミトンを見た者はいなかった。朝食の席にもいなかった。長老の家にも訪れてはいなかった。

もともと急な同行人。無理に足並みを揃える必要もないだろう。村での挨拶を終えたリユートは、一人でガイタ村を出発した。

村が見えなくなつて、さらに少し歩いた。

気づけば、リユートは森の中に入っていた。清々しい空気がリユートを包む。木漏れ日は、その先にある晴れ渡った空の存在を証明している。また、微かに吹く風は心地よい。

そう感じたときだった。リユートを呼び止める声がある。その声には聞き覚えがある。リユートはその声の主の名を呼びながら、その方向を向く。

「ミトン！」

「思ったより早くてよかった。さすがに昼を過ぎれば、ここから離れるつもりだったからな」

岩陰に座り込んでいたミトンが立ち上がる。特に何も変わった様子はない。

「どうして一言もなく村から？」

「魔物は退治した。それで俺の仕事は終わりだ。本当はリユートに会うつもりもなかったのだがな」

そう言いながら、ミトンを剣を抜く。それを見たリユートは、反射的に間合いをとる。

「何の……つもりですか？」

「勘違いするな。俺達はここでお別れだ。だから、一つだけ贈り物をやるうと思ってるな」

「贈り物？」

「そうだ。リユートも抜け」

リユートは、ミトンの言葉の意味を理解できなかった。だが、ミトンにふざけている様子はない。自信に溢れたその表情に負け、リユートは背中 of 剣を抜いた。

「一本勝負だ。来い」

そう言って、ミトンは手招きをする。

リユートは一呼吸する。そして、剣を構えた。その視線の先に立っているミトンは、まだ剣を構えていない。だが、その余裕の表情は、その準備が完了していることを伝えるのに十分であった。

リユートが動く。一気にミトンに詰め寄り、そしてみね打ちを命中させた。

そう、それは確かに命中したはずだった。だが、次の瞬間、倒れていたのはリユートであった。

何が起きた？ それすらリユートは理解できない。

「これがお前自身の立ち位置だ」

その言葉の後、足音が聞こえる。おそらくここから立ち去るつもりだろう。だが、リユートにとってはどうでもよくなっていた。そのリユートの耳にもう一言だけ聞こえた。

「……魔王も、大体こんなもんだ」

リユートの言葉を待つことなく、その足音は遠ざかっていった。一方のリユートはしばらくその場で空を眺めていた。木々の隙間から覗く陽光は、少年にとって眩しかった。

(リユート・フェイタス)

その十八歳の少年は、このビルナードという舞台上、”魔王”と”鏡”をめぐる物語に巻き込まれる人物の一人となる。その物語は、ある一人の少女との出会いから始まった。

## 悪夢 消えた姉

『……ろさせない』

暗闇の中、その耳に声が聞こえた。

懐かしい声だ。しかし、その声にいつもの優しさはない。ただ強い覚悟だけを感じる。

『……殺させないっ！』

微かな月明かり。

それと同時に、その目の前に一人の女性の姿が映った。そして、その先にはこちらを向く巨大な獣の姿がある。

『リユートは殺させないっ！』

『姉さん……、姉さん！』

獣はその女性をくわえ、その場を去った。

絶叫。

月明かりの下、ただ悲しく、少年の発したその声はどこまでも響いた。



## 1 カルテラの噂

リユートは目を覚ました。

そこは深い森の中。鳥の声がどこからともなく響き、木漏れ日は暗い森に微かな明かりを与えた。冷たい空気は清々しい。しかし、その中にありながらも、リユートの表情はその自然と対極であった。

「もう一年、か」

ふと言葉が漏れる。

リユートが見つめているのは、これから自分の進む先だ。空まで届きそうな大樹がそこにある。その大樹を見て、リユートは再び自分がこの大地に戻ってきたことを認識した。

首都バリプレートンの治める土地ビルナード。年中穏やかな気候であるこの土地は、女神伝説の残る地として世界でも有名である。そして、リユートが立っているのは、その東の境界に位置しているヴアルサという名前の大きな森である。

ミトンと別れてから一ヶ月以上が過ぎる。その間、リユートは一度このビルナードを離れていた。そして、自分自身をもう一度見つめ直した。しかし、やはりリユートの答えは変わらなかった。その気持ちを確認した後、再びこの大地に戻ってきた。

リユートは一呼吸置く。そして、静かに言葉を放った。

「魔王……必ずこの手で」

その強い気持ち音を音として確認した後、リユートは大きく一步を踏み出した。

## 大樹の村カルテラ

そこはカルテラという村。

大森林ヴァルサ内であり、大樹の根元あたりに位置している。この村の象徴ともなっている大樹は、この村を訪れる旅人の目印となり、また観光の中心ともなっている。小さいながらも村は活気に溢れていた。

リユートは大樹を見る。この村を訪れるのは初めてではなく、当然この大樹を見るのも初めてではない。しかし、何度見てもその存在には圧倒される。一説では、この地方に伝わる精霊ヨークを宿しているらしい。精霊など存在するはずもないと思いつつも、この大樹を前にすると、自分の考えの方が間違いではないかと惑わされる。これはリユートだけではなく、この地を訪れる多くの観光客も同じだ。

リユートは、まず宿へ向かった。さすがに訪れる客が多いこともあり、小さな村には似つかわしい立派な宿がある。リユートは迷うことなく、その宿へ向かった。

入口まであと十メートルというところであろうか。リユートの耳に村人達の噂話が聞こえる。

「み、み、見たんだっ」

「だから、何をだよ？ もう少し落ち着けて」

「だ、だから、幽霊屋敷だよっ！」

「幽霊屋敷？ ああ、そう言えば昨日マグの奴も言ってたか。突然建物が現れたって。本当なのか？」

「本当だともっ！ 嘘だと思うならお前も見てみるよ。西の方へ行けばすぐに分かるって！」

「ああ、分かったって。信じるって。だから、そんなに興奮するなよ。それにしてもおっかないよなあ。何かの前触れじゃないよな」

リュートの足が少し遅くなる。聞き込むほどではないが、気になる内容ではあった。だが、それ以上を聞くことなく、リュートは先へ進む。そして、目の前にある大きな宿に入った。

中に入ると、リュートと同じくらしい年頃の娘がカウンターに立っていた。胸には名札があり、そこにはアンナと書かれてあった。以前訪れたときには見ていない顔だ。おそらく新しい従業員なのだろう。

そのアンナは、満面の笑顔と明るい声でリュートに声を掛ける。

「いらつしゃいませ。一名様、お泊りですか？」

「一晩頼みます」

簡単にチエックインを済ませた後、アンナは背後の戸棚を開け、鍵を一つ取り出す。

「はい。これがお部屋の鍵です。二〇五号室。二階に上がって、左手に進んでくださいね」

一礼の後、リュートは鍵を受け取る。そのリュートをアンナは興味深そうに見つめる。

「観光……ではないですよね。その剣、もしかしてバリプレート聖騎士団への志願ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんです」

「それじゃ、もしかして魔物ハンターの方ですか？」

アンナは大きく目を開けてリュートに問い掛ける。当たりではないが、外れというわけでもない。リュートは話を合わせることにする。

「そんなところですよ」

「すごいっ！ それじゃきつと強いんですね。はあ、マグもこれくらい勇敢だったらなあ……」

「？」

「あ、いえいえこつちの話ですよ」

少し首を傾げるリユートを見て、アンナは照れ笑いをする。そして、さらに話し掛けてくる。

「最近魔物が現れているそうですね。実は、もう一人魔物ハンターの方が泊まってるんですよ。バリプレードの依頼を受けて、カミツテへ行く途中だとか」

「カミツテへ？」

リユートは思わず聞き返す。

カミツテとは、このカルテラの北西に位置する村である。この地方に伝わる女神伝説の”女神”が生まれ育った村として有名であり、今でもその女神を祭っている。首都バリプレードと並び、この地方の顔とも言える場所だ。

しかし、部外者を快く思わない民族性であり、外界との接触は極めて少ない。実はリユートも門前払いを受けた一人である。

それにしても、バリプレードからの依頼。カミツテ。魔物ハンター。意識しすぎなのだろうが、リユートの中でこれらの単語が大きく響く。

「バリプレードで何かあったんですか？」

「私も詳しくは知らないんですけどね。亡霊騒ぎですって」

亡霊？ と、リユートは再び首を傾げる。魔物騒ぎであればよく

耳にする。だが、亡霊というのはリユートにとって初耳だった。その亡霊を抑えるために、女神様の力を借りる。まるで祈祷師のようである。

そのとき、リユートは宿の外で耳に入れた噂話を思い出す。

「そういえば、さっき外で幽霊屋敷がどうのって話を聞いたんですけど」

「え？ ああ、さてはマグね。もう、仕方ないわね」

また出たマグの名前にアンナは小さな溜息を付くが、再び笑顔に戻る。よほどのマグには頭を悩まされているのだろう。

「バリプレートの亡霊騒ぎとは別の話です。昨日か一昨日あたりらしいんですけど、森の中に突然建物が現れたらしいですよ。すごく古い建物らしくて、中に人の気配もない。だから、幽霊屋敷なんですって」

「そうですか。バリプレートの亡霊といい、最近はこんな話が流行っているんですか？」

アンナは慌てて首を振る。

「とんでもありません。バリプレートの方は分かりませんが、うちのはただの勘違いだと思います。普段は人が歩かないような場所って聞いてますし」

普段は歩かないような場所であれば、たまたま昔の建物が見つかっただけでも考えられる。しかし、それだけで騒ぎ出したりするものだろうか。表で見た人物の様子をリユートは思い出す。かなり興奮していたのを覚えている。

「その建物のある場所を教えてくださいませんか？　少し見てみたいんです」

「本気ですか？」

「少し気になります。もしかしたら、何か魔物がいるかもしれませんし」

男の人はみんなこうなのか、といったアンナの表情。声に出したわけではないが、何となくリユートにはそう伝わった。しかし、リユートは気にすることなく、アンナの返事を待った。

幽霊屋敷の場所を聞いた後、リユートは二〇五室に入った。しかし、荷物を置いた後、部屋を構成する木々の香りを感じる暇もなく、リユートはすぐに部屋を出た。

目指す場所は、カルテラで噂の幽霊屋敷。

急ぎ足のリユートは、カウンターのアンナの見送りを受け、そのまま宿を出た。

## 2 護って欲しいと少女は言った

### 精霊の棲む森ヴァルサ

暗い森は静寂に包まれていた。しかし、そこに不気味さはない。優しい森の香りは、むしろ安らぎを感じさせた。

その森の中をリユートは一人進んでいた。時折現れる獣達を追い払いながら、既にカルテラから一時間ほど歩いただろうか。アンナから聞いた情報を頼りに、リユートは幽霊屋敷を探していた。

しかし、広大な森の中、しかも一般道から外れた場所である。幽霊屋敷はなかなか見つからない。

一度戻るべきか、という考えがリユートの頭を過ぎる。そして、手元の地図を見た。アンナの付けた赤い印が目立っている。現在位置からそれほど離れてはいない。しかし、よくよく考えれば、アンナの情報もまた人からの噂だ。正確な位置をアンナが知っていたわけではない。

リユートは溜息をつく。もう少し探したら、一旦戻ろう。そう決めたリユートは、さらに森の奥へと進んだ。

『  
』

ふとリユートの耳に何かが聞こえた。

それは声のように感じられた。男か女かも分からない。ただ何故か声のする方角は分かった。リユートは迷うことなく、足を進める。

しばらく歩いた。すると、リユートの目の前に一軒の屋敷が姿を現す。リユートは一目で理解できた。それが幽霊屋敷である。

噂の通り、建物はかなり古風である。少なくとも現代のカルテラの文化とは異なっている。しかし、不思議とそれほど老朽化は感じ

られない。

リユートは建物の玄関に立ち、扉に手を掛ける。扉に鍵はかかっておらず、リユートは建物の中に入れた。

### 幽霊屋敷

二階建ての屋敷は、それほど広いものではなかった。

生活するにはさっぱりとしており、誰かの別荘、そんな雰囲気も漂わせている。窓から適度な明かりが入っており、内部はそれほど暗くない。幽霊屋敷というには少し物足りないくらいである。

ただ、人の気配はなく、床のきしむ音は孤独を実感させるのに十分であった。もっとも、それに慣れたリユートにとっては、特に気になるものではなかった。

建物の一階を探索し終え、リユートは二階へと上っていく。いくつかの部屋がある。ひとまず、リユートは手前の部屋のドアを開けようとする。

『

再びリユートの耳に何かが聞こえる。それは、その部屋の中から聞こえている。

一瞬、リユートに緊張が走る。呼吸が止まり、心臓の音が強く響く。

覚悟を決め、リユートはドアを開く。ドアの音は静かに、しかし確かに響きわたり、それが緊張を一層引き立てる。リユートは部屋の中へと一步を踏み出す。無意識のうちに、片手は剣の柄を握り締めていた。

周囲を見渡す。特に変わったものはない いや。

リユートはゆっくりと歩く。その目の前にあるのは小さな円卓だ。



そして、その上には位牌が一つ置かれていた。寂しげに置かれたその位牌は、幽霊屋敷が漂わせる孤独をよりいっそう強めた。

リュートは何気なく位牌を手に取る。そこには何かが書かれている。リュートはそれを音にする。

「ミゼファン……オン………カリスペルク………ネーゼシア  
ン………？」

やや長いが、おそらくそれは人の名前だ。この屋敷の主、そう思うと、リュートはふと寂しさのようなものを感じた。そこに感じられた孤独は、どこか近しくもある。リュートは黙ったまま位牌を置く。そして、少し目を閉じる。

静かな黙祷。

それは位牌の主へか。それとも自分のためか。リュートはただ黙祷した。そのときだった。リュートは何か違和感を感じる。

「（これは……光？）」

リュートはゆっくりと目を開く。

光の主は先ほどの位牌である。リュートは位牌から目を離すことなく、ゆっくりと距離を置こうとする。

その一瞬光が強まった。その眩しさに、リュートの脳がその目を閉じると命令した。

光が収まる。

リュートは再び、先ほどよりもゆっくりと目を開く。しかし、その視界が明らかになった瞬間、驚いたリュートはその目を大きく見開いた。

そこには、一人の少女が立っていた。

「（幽霊か？）」

それが最初の印象であった。

幽霊屋敷と呼ばれた場所で、その少女は突然目の前に現れた。年齢はリユートと同じくらいであろうか。整った顔立ちをしているものの、その表情はどこか弱弱しい。透き通るような白い肌や、飾り気のない服装は、さらにその弱さを強調させていた。しかし、その瞳だけは、少女の容貌に対して異端であった。

強い威圧を与えるような金色の瞳。それは強く印象的であった。

「……………」

少女は何も喋らず、ゆっくりと周囲を見渡した。何かを確認しているかのように見える。一瞬リユートと目を合わせ、今度は静かに瞳を閉じる。そして、その胸に手を当てた。

その間、リユートは動けなかった。その口を動かすことすらできなかった。

しばらくすると、少女はその瞳を開く。再び現れた金色の瞳は、はつきりとリユートを捕らえていた。

少女は動かない。まだ何かを考えているようだ。

その静寂に耐えきれなくなり、ついにリユートがその沈黙を破る。

「君は…………その位牌の？」

「…………はい」

少女が返事をした。

見た目の印象通りの弱弱しい声。その透き通るような細い声は、少し賑やかな町中ではまず聞き取れないであろう。

リユートは質問を続ける。

「幽霊…………なのか？」

「いえ……」

否定した少女は少し俯く。やはり何かを考えているようである。幽霊ではない。この状況でそれを信じろというのも難しい。しかし、やや緊張状態にあるリユートは、その言葉の真実を考えるまで至らず、ただ少女の言葉を受け入れた。

再び静寂が訪れ、今度は少女がそれを破る。

「あの……」

そこで一瞬言葉は止まる。リユートは息を吞んで次の言葉を待つ。

「あなたは、私を護ってくださいますか？」

唐突なその言葉。それがリユートの耳へと響いた。

そして、それはリユートの頭の中へと流れ込んだ。

少女の意図は分からない。しかし、それはリユートの”目的”にとって意味のない話ではあった。その強い”目的”は、少女のささいな願いよりも大きい。そのはずだった。

しかし、リユートの頭の中である声が重なった。

『リユートが私を護ってよ』

それはとても懐かしく、そして忘れることのできない声であった。それはリユートにとっての”光”であった。

心臓の音が聞こえる。強い鼓動が聞こえる。そして、胸を締め付けられそんな感情と共に、リユートは少女の金色を瞳を見つめた。

「……君を護る」

短い言葉。

それは自然にリュートの口から発せられた。しかし、その無意識に対して、不思議とリュートに後悔はなかった。逆に、温かい何かに包まれたように感じていた。

「ありがとうございます」

少女の小さな声が響く。

心なしか、リュートにはその少女の表情が少し明るくなったように見えた。遠い昔に感じた”存在”が少女に重なったように見えた。リュートは少女に近づいた。

「僕はリュート。君の名前は？」

「ネーゼシアンです。……ネーゼ、と呼ばれていました」

(ミゼファン・オン・カリスペルク・ネーゼシアン)

女神伝説の残るビルナードで、その二人は偶然に出会った。そして、それが必然であるかのように、物語はめぐり始める。

リュートは手を差し出す。その手に少女の手が触れたとき、初めてリュートはその手に温もりがあると知った。

### 3 カミツテの鏡

大樹の村カルテラ

「鏡の場所へ連れて行って欲しいです」

しばらく考え込んだ後、ネーゼはそう言って頭を下げた。直前に見せた表情は真剣そのものであった。また、頭を下げたネーゼは少し震えている。

その一方で、ネーゼの言葉を受けたリユートは固まっていた。ひとまず口を含んでいた水をゆっくり飲み込み、コップをテーブルの上に置いた。

「ネーゼ、ちょっと顔を上げてもらってもいいか？」

ネーゼはゆっくりと顔を上げる。金色の視線と共に、真剣さと不安さの入り交じった表情が見える。それを前にして、リユートの言葉は一瞬止まる。

リユートにとって、それは何気ない質問であった。

カルテラに戻った二人は、遅い昼食を取っていた。大樹の見える人気店での簡単な会話。ぎこちなさを少しでも減らすため、「リユートさん」と呼ぶのはやめてもらった。リユートも友人に話すかような口調で話し掛けている。

そして、その会話の中で、「どこか行きたい場所はあるか」とリユートは尋ねてみた。それに対する答えが「これ」である。さらに、緊張の漂う空気が加えられ、それがリユートは戸惑いを与えた。

「鏡の場所って……どういうことなんだ？ 悪いんだけど、僕には

その意味がよく分からなくて」

ネーゼは少し視線を落として考え込む。

その間、リユートは自分なりに”鏡の場所”について考えてみる。鏡など、このビルナードでは珍しくもない。この店を探せば当然見つかるはずだし、店近くの雑貨屋に行けば売っているはずである。そこへ連れていくことはできるが、まずネーゼの期待する結果ではないだろう。ネーゼの出す空気は、アクセサリをおねだりする女の子のそれとは明らかに異なっている。

考えられるとすれば、ネーゼ個人に関わる特別な鏡。あるいは、鏡という人物、地名といったところだろう。

そこへネーゼが視線を上げる。

「カミツテの鏡……のある場所へ行きたいです」

ほぼリユートの予想通りである。また、追加された”カミツテ”という単語に、リユートはほんの少しだけ納得感を得ていた。

女神発祥の地と呼ばれるカミツテ。そこに暮らす人々は、世界で唯一”金色の瞳”を持っていることで有名である。リユートは、幽霊屋敷からカルテラに戻るまでの間に、そのことを思い出していた。このため、”カミツテの民”と思われるネーゼがその鏡を求めるところに違和感はなかった。

ただし、ネーゼの言い回しに対して、一つだけ気になる点がある。

「もしかして、その鏡はカミツテに行っても見つからない。そう考えた方がいいのか？」

その言葉に、ネーゼは再び視線を落とす。

「それは……分かりません」

ネーゼが視線を落とした時点で、リユートはその答えを予想していた。そして、ネーゼの言葉を聞いた後、その先行きの見えない目的にため息をつく。リユートの持つ”目的”へと戻るのは、しばらく先になりそうである。

「それでも何か手掛かりは欲しいな。とりあえず、カミツテへ行ってみるのはどうかな？　ここから遠くはないし」

そのリユートの提案に、ネーゼはすぐに顔を上げる。

「はい。ぜひお願いします。カミツテなら、きっと……」

まるで何かにすがりつくような表情でネーゼは答える。それにより、ひとまずの行き先は決まった。リユートは少しだけ安心する。排他的な村という問題はあるが、同胞のネーゼがいれば中に入れてもらうことはできるだろう。

リユートはテーブルに置かれたコップを取り、その中に入っていた水を一口飲む。さらに気持ち落ち着いたところで、リユートは再びネーゼの方を見る。

「それで、それはどんな鏡なんだ？」

それもリユートにとっては何気ない質問であった。

何やら特別な鏡のようだが、リユートはその形状すら知らない。これからネーゼと一緒に探すことを考えれば、ごく当たり前の質問内容である。

しかし、ネーゼはその質問の後、小さく何かを呟いて、そのまま俯いた。その姿はどこか悲しげに見えた。それを見て、リユートは慌てて口を開く。

「あ、いや。話せないなら  
大きな鏡……」

ネーゼは俯いたまま声を出す。リユートは言葉を止めて、その声を待つ。

「人の姿を映せるくらい大きな鏡です。あとは、丸っぽい形で……他に目立った特徴はありません。でも」

ネーゼがリユートを見る。悲しげながらも、その視線は強い。

「見れば必ず分かります」

明らかにネーゼの言葉は矛盾していた。しかし、リユートは首を傾げることなく、その言葉を聞いていた。ネーゼの視線は、リユートに疑問を持つ余裕を与えなかった。

リユートは息を呑み、そして静かに頷いた。

食事の後、リユートはネーゼを連れて宿へ向かっていた。

カルテラという村は、まだ魔物騒ぎに遭ったことがないらしく、道行く人々の表情は平和そのものであった。

その一方で、ネーゼは物珍しそうに村を眺めていた。

観光地として知られるカルテラには、観光客向けの店がいくつかに並んでいる。その意味では、目を引くものも多いと言える。

幽霊屋敷で現れた少女。さらには厳格で有名なカミツテの出身。そのことを考えれば尚のことであろう。

「ネーゼ、少しその辺りを歩いてみるか？ どうせ宿に戻っても何



もすることはないし」

カルテラの街並みを見回していたネーゼは、少し驚いたような表情をする。その後、リユートの言葉に頷いた。

カルテラの名物と言えば大樹である。

このため、お土産売り場では、大樹にあやかった商品が数多く置かれている。そして、もう一つだけ目に付くものがある。それは精霊ヨークだ。飲食物の類だけではなく、ヨークを象った置物も売られている。さすがに”存在しない”だけあって、その姿は置物ごとに異なっている。ただ、女神伝説の影響のためか、女性の姿が多い印象だ。

その女性姿のヨークを見て、リユートは一つ思い出す。精霊は存在しないが、”不思議な力”については聞いたことがある。リユートは、ネーゼへと視線を向ける。

”カミツテの奇跡”。

それは”カミツテの民”にのみ許された力である。噂では、あらゆる病気や怪我を癒せるということだ。リユートを含め、ほとんど人は実際にその力を見たことがない。しかし、女神伝説と同様に、その力は人々の共通認識となっている。

噂が本当であれば、ネーゼもまたその不思議な力を持っている。

リユートは、ネーゼが位牌から出てきたことを思い出す。さらに、”カミツテの鏡”という言葉も思い出す。漠然とではあるが、リユートは心の中で”何か”が強くなっていくのを感じた。

しばらくカルテラの町を見物した後、二人は宿の近くまで来ていた。その宿はもう目の前に見えている。

しかし、そのときだった。

リユートの横を歩いてきたネーゼが突然その足を止める。そして、  
ネーゼはそのままその場に座り込んだ。

#### 4 孤独を恐れる孤独な少女

道に座り込んだネーゼは少し震えていた。

リユートは慌てて姿勢を落とし、ネーゼの顔色を確認した。

「ネーゼ、大丈夫か！？ どこか具合が悪いのか！？」

リユートの手がネーゼの肩に触れる。今にも折れてしまいそうな肩からリユートの手へと小さな振動が伝わる。さらに、リユートの耳には、小刻みに吐かれる息の音が聞こえてきた。

リユートは少し後悔する。ネーゼはここまでの間、特に疲労といった様子を見せてこなかった。このため、リユートはその点への気遣いを失念してしまっていた。

しかし、不幸中の幸い、すぐ目の前には宿が見えている。走れば五、六秒程度で到着できる距離だ。すぐにネーゼを休ませることができる。

リユートは立ち上がり、そしてネーゼをちらりと見る。

「少しだけ待っててくれ。すぐに誰かを呼んでくる」

リユートはネーゼから離れようとする。

しかし、リユートの足は何かにつ張られる。その足元にはネーゼの手が見えた。ネーゼは震えながらも、しっかりとリユートの服を掴んでいる。

「お願いです。一人は……嫌です」

「だけど」

「お願いです……」

ネーゼは小さく声を絞り出した。その表情には辛さと必死さが入り混じっている。それを見たリユートはその場を動けなくなった。

「ネーゼ、何とか立てるか？」

ネーゼに言葉はない。まず立ち上がれないと解釈していいだろう。困ったリユートは再び宿を見る。中に入れば、おそらくは店員のアンナがいるはずだが、そのアンナの姿が見えた。

アンナは何やら話をしながら宿から出てくる。その後が続いて、一人の青年が姿を現した。その青年は腰に長剣を携えている。宿に宿泊していたという”もう一人の魔物ハンター”なのであろう。しかし、その服装にはやや洒落っ気があり、そこからは魔物との戦いなど想像できない。

「それじゃ、ありがと」

「はい、お気をつけてください。また来てくださいな」

「いや、アンナちゃんみたいなかわいい子に、またって言われたら断れないよ。商売上手なんだから。また来るよ。さてと。ん？」

その青年の視界にリユート達が入る。そこに映るのは、道に座り込んでいる少女と、その少女を介抱する少年である。

青年はすぐに状況を理解し、急いでリユート達の方へと駆け寄った。それに気づいたアンナも青年の後に続いた。

「その子、大丈夫？」

「体調が優れないようでしたら、どうぞ中へ。ベッドもお貸しできますので」

助かった、とリユートは思う。

その一方で、ネーゼはまだ震えたままである。さらに、その手は

強くリユートの服を握り締め続けている。心なしか、リユートはその力が先ほどよりも強くなっているように感じた。

「安心して。すぐに休めるから」

「私、まだ……」

そのとき、その様子を見ていた青年が動いた。

「何かやばそうだし、とりあえず俺は医者を呼んでくるよ。確か、すぐそこだったはず。二人はその子をベッドに寝かせておいて」

そう言い残して、青年は医者のところへと走り出した。一方のリユートとアンナは、二人でネーゼを宿の中へと運んだ。

宿へと入り、アンナがカウンターのすぐ横にあるドアを開く。その先の簡素な部屋は、おそらく従業員用の休憩室なのだろう。アンナは急いでベッドの用意をして、ネーゼを寝かしつけた。横になって楽になったのか、ネーゼの表情は先ほどよりも落ち着いているように見える。

しばらくして、先ほどの青年が医者を連れて戻ってきた。

「異常はありませんね。ただの疲労かと思います。今日はゆっくりと休ませてあげてください。何かあれば、またお呼びください。今日は診療所にいますので」

「ありがとうございます」

そのまま医者は部屋を出る。見送りのため、アンナもその後が続いた。また、医者を呼んでくれた青年は、いつの間にかいなくなっていた。その部屋に残っているのは、リユートとネーゼだけである。リユートは、ベッドで横になっているネーゼを見る。ネーゼはい

つの間にか眠っていた。よほど疲れていたのだろう。  
そのとき、ネーゼの口が動いた。

「一人は……嫌です……」

暗い闇。

そこにあるのは大きな鏡。

その鏡は闇を映し続ける。

その前に白い光が現れる。

その光は少女を装い鏡を見つめる。

しかし、鏡は少女を拒み、その姿を映さない。

少女は独り、静かに立つ。

「……？」

ネーゼは目を覚ます。

その視界に見えているのは、見覚えのない天井である。ネーゼは  
ゆっくりと周りを見てみる。やはり、そこはネーゼにとって見覚え  
のない部屋であった。

不思議に思ったネーゼは、ゆっくりと身体を起こしてみる。その  
とき、寝巻き姿になっているのに気づいた。

ネーゼは今の状況について考えてみる。しかし、何一つ思い出す

ことができない。

さらに考えようとしたところで、部屋のドアが開く。そして、ネーゼにとって見知らぬ少女アンナが入ってきた。

「よかった、気がつきましたか」

「あの……ここは？」

「ここは、カルテラが誇る宿フォレストナイトよ。なんてね。でも本当によかったです。心配しましたよ。あ、すぐにリユートさんも呼んできますね」

「カルテラ……？ リユート……？」

そう呟きながら、ネーゼは部屋から出るアンナの背中を眺めた。その背中が見えなくなった後、ネーゼは意識を失う前のことを少し思い出した。

ネーゼは、もう一度だけ周囲を確認してみる。その目に映るのは、よく手入れされた簡素な部屋。ただそれだけである。それを確認した後、ネーゼは胸に手を当て、大きく息を吐いた。

しばらくして、リユートを連れたアンナが部屋に戻ってくる。ネーゼの様子を見て、リユートの表情は緊張から安堵へと変わった。

「ネーゼ、大丈夫そうでしたよ。無理させてしまって悪かった。まだ横になっていた方がいい」

ネーゼは促されるまま横になる。

しかし、眠るのは怖かった。夢を見るのが怖かった。そこにある孤独が怖かった。

ネーゼは、目の前に座っているリユートの服をそっと掴む。

「どうしたんだ？」

リユートの声にネーゼは返事をできなかった。震えているわけではない。しかし、ネーゼの表情はどこか不安そうであった。それを見たリユートは、静かにその場に座る。

「大丈夫。しばらくここにいろよ」

その言葉を聞いて、ネーゼの心は少しだけ落ち着いてきた。しかし、まだその不安が消えたわけではない。

ネーゼは夢で見た光景を思い出す。

暗闇の中で、少女はたったひとりであった。そして、その目の前に唯一あつた鏡は少女を受け入れなかった。それは、まるで何かを警告しているかのようにもあつた。しかし、孤独を恐れる少女には、その鏡を求めるしか道が残されていなかった。

リユートの服を掴むネーゼの手が強くなる。

それは孤独、そして鏡を求めることに対する少女の不安を表していた。それを知らない少年は、静かにその少女を見守った。



## 5 ヨークの石碑

カルテラ特産の芋を主食とし、野菜サラダとスープを付けた素朴な朝食がテーブルに並ぶ。それをリュートは口にする。その隣にはネーゼの姿もある。食堂まで来れたことを考えると、体調の方はかなり回復しているようだ。しかし、目を覚ましてからまだ一日しか経っていない。油断しない方がいいだろう。

幸い、宿側の親切により、ネーゼが回復するまで無料で部屋を貸してくれることになった。アンナが言うには、これがカルテラの良らしい。

そのアンナが飲み物を持って現れる。

「飲み物のおかわりはいかがですか？」

「ありがとうございます。ネーゼは？」

「私もお願いします」

「はい。ネーゼさんも元気になってよかったですね」

そう言いながら、アンナは二人のカップに飲み物を注ぐ。

「心配を掛けました」

「いえいえ。でも、カミツテの民でも倒れたりするんですね」

「いや、あれは僕のせいです。ネーゼが疲れているのに気づかず、あちこち連れ回って。次からはもっと注意します」

「優しいですねえ。本当に出会ったばかりなんですか？ うちの…  
…つとこっちはいいか」

本当にどうでもいい。リュートはあえて何も触れない。  
そのとき、リュートは”ある青年”のことを思い出す。

「そういえば、あの人は？ 医者を呼んでくれた」  
「ああ、カープさんですね。一昨日に話した魔物ハンターの方ですよ。うちの常連さんで、よく大樹を見に来るんですって。あの日は、早々と出て行きました」

「そうですね。お礼くらい言いたかったですけど」  
「そろそろ出発しないと、依頼主から怒られるんですって」

そう言いながら、アンナは笑う。

そういえば、そのカープという青年の依頼主はバリプレートだ。ネーゼの一件ですっかり忘れていたが、バリプレートでは亡霊騒ぎが起きている。魔王、当然その可能性もあるが。  
リユートはネーゼの方を見る。ネーゼは黙ったままスープを口に運んでいる。食事といっても、先ほどからスープくらいしか口にしていない。まだ体調の方は万全でなさそうだ。  
ひとまず焦る理由はない。そう考えたリユートは食事に戻る。亡霊騒ぎといっても、おそらくこれまでと同じく、意味のない”魔物”退治で終わるだけだ。

「あ、そうだ」

不意にアンナが軽く手を叩く。何かを思い付いたらしい。実に分かりやすい性格だ。

「大樹の根元に精霊ヨークを祀った石碑があるんです」  
「それなら知っています。有名な観光スポットらしいですね」  
「はい。カルテラの自慢です。私も好きな場所で、あそこに行くと不思議と気持ちが悪く落ち着くんですよ。ネーゼさんにもいいかもしれませんよ。宿からの馬車もありますし」

ヨークの石碑といえば、人の心を安らげることで有名だ。ただの

迷信と考え、リユートはこれまで訪れたことなどなかった。この機会に行ってみるのも悪くはないだろう。

だが、やはりネーゼの体調が気になる。リユートはネーゼの方を見る。そのリユートの気持ちを探したのだろう。ネーゼは頷きながら答える。

「私は行ってみたいです」

「でしょ？　これで決まりですね、リユートさん」

ネーゼの返事にすかさずアンナが反応する。こうなると断っても無駄だろう。

アンナの性格のためだろうが、随分と打ち解けてしまったようだ。

大樹ヨーク

「わあ……」

その声を漏らすネーゼの頭上には、天を覆い尽くすかのように大樹が広がっている。樹齢千年を超えるらしい。もし、千年前に魔王アティラスが実在したというのであれば、この樹はその歴史をも見ていたのだろう。

「皆さん驚くんですよね。さあ、石碑はすぐそこですよ」

そう言うのはアンナだ。

案内役としてリユート達について来たのだ。宿の方は交代制らしく、休憩扱いとなっている。というより、ネーゼの一件で、ずっと働き詰めであったアンナに対する宿側の配慮だったのだろう。

アンナに案内され、リユート達は石碑の目の前まで辿り着く。運

よく、他に観光客はいないようだ。

リユート達は石碑の前に立つ。大樹との対比のためか、石碑は小さく映った。そこに刻まれている文字の意味は分からない。

それにしても不思議な気分だ。空が大樹に隠されているにも関わらず、この場所はまるで太陽の光を浴びたみたいに温かい。これが精霊の力だというのであろうか。

「ネーゼさん、こっちへ」

「？」

アンナがネーゼの手を引く。不思議に思ったリユートは尋ねる。

「どうしたんですか？」

「あ、リユートさんは駄目ですよ。これは女の子だけの儀式です」

「儀式？」

「ふふ、そうです」

詳しいことは秘密らしい。二人は大樹の反対側へと向かう。仕方なく、リユートはもう一度石碑を見る。そのときだった。

「くすくす」

女性の笑い声が聞こえる。リユートは声のする方を見る。

大樹の根元、そこに一人の女性が座っていた。その女性はリユートに向かって小さく手を振る。

「ごめんなさいね。あまりに微笑ましくて。若いっていいわね」

優しい声を出しながら、その女性が近づいてくる。

リユートより年上に見えるが、それでもおそろくまだ二十代だ。ど

こが神秘的で、知的な雰囲気を漂わせている。  
女性は優しくリユートに微笑む。

「私はリーネア。旅行が趣味で、世界中を見て回っているの。よろしければ、あなたの名前を聞いてもいいかしら？」

「僕はリユートです」

「そう。綺麗な名前ね。この地方で言うと、かつてアズトーサ王に仕えた詩人と同じ名前よ。詩はお好きかしら？」

「いえ、詩はちょっと……」

「それは残念」

リーネアは微笑みを浮かべたまま、石碑の方を見る。

「知っているかしら？ この石碑が祀る精霊の名前はヨーク。精霊の中でも、特に信仰の強い四大精霊の一角よ」

「もちろんです。大樹に宿り、人々に恵みを与える、ですよね？」

「その通りよ。とはいえ、精霊の存在なんて、多くの人は半信半疑これだけ信仰が強いのに不思議なものね。私は信じているんだけどな」

「精霊をですか？」

「おかしいでしょ？ でも、この場所に立つと、いつもそう思うの。だって、心が安らぐもの」

そう言いながら、リーネアは両手を広げる。

そのリーネアに陽光が降り注ぐ。神秘的な光に照らされたその姿は美しかった。伝説の”女神”が存在するというのであれば、こんな感じなのであろうか。

そのとき、リユートはふと思う。このリーネアであれば、魔王について笑わず聞いてくれるのではないか。むしろ手掛かりを知っている、そんな期待すら感じさせる。

「精霊を信じているってことは、もしかして魔王の噂も信じていたりしますか？」

「魔王？ それはまた神秘的ね。そうね……」

リーネアは、大樹から零れた光を手ですくう。

「魔王はこの光と同じ」

「どういふことですか？」

「掴もうとしても掴めず、ただ幻のよう。真実であり、同時に偽りでもある。魔王は、魔王を信じる者の前にだけ現れるものよ」

その言葉の意味はよく分からなかった。

詩的な言葉からは、ただのロマンティストの一人として信じているだけのようにも感じられる。しかし、どうしてだろうか。リーネアの言葉には力を感じた。言葉そのものではない。空気、といえは正しいのだろうか。

考え込むリユートに対し、リーネアはさらに言葉を続ける。

「あなたは信じているのかしら？」

「……はい」

「ふふ、正直ね。でも、笑われるから内緒にした方がいいわよ。そんなことを信じる人なんて魔王信仰者くらいなんだから。もしかしてそうなのかしら？」

「いえ……」

「そう思ったわ。さ、考えるのは終わり」

そう言って、リーネアはその両手を軽く叩く。

「魔王もいいけど、今の彼女を大切にしないで。これは、お姉さん

からのアドバイスよ。ヨークが人々にもたらすもの、恵みの他にもう一つあるのよ?」

「何ですか?」

「恋愛よ。女の子にとっては大切なこと。じゃあね。ヨークの儀式ならそろそろ終わるわ。邪魔者は消えるわね」

リーネアはそのまま大樹から遠ざかるように歩いていった。

自由気まま、まさにその言葉がぴったりと似合う。あんな風に自由に生きられたらどれだけ幸せなのだろうか。いや……それは自分には許されない。そう考えたリユートは小さく頭を振る。

そのとき、ネーゼとアンナが戻ってくる。ぱつと見たところ、何も変わりはない。

「お待たせしました」

「儀式はもういいのですか?」

「はい。ほら、これを見てください」

そう言って、アンナはネーゼの左腕を手取る。よく見ると、何が身に付けられていた。

「これはミサンガ? 切れたときに願いが叶うというやつですよ?」

「はい。でも、このミサンガは少し違うんです。このミサンガ自体に願いはかけませんから」

「じゃあ、どういうミサンガなんですか?」

そう尋ねると、アンナは得意げに説明を始める。

「"儀式"を終えたミサンガには精霊ヨークの力が宿っています。その力で、女の子に少しずつ奇跡を与えてくれるんです。そして、

女の子に本当の幸せが訪れたとき、ミサンガはその役割を終えて切れるんです」

つまりは、この精霊ヨークを絡めたミサンガというわけか。根本は何も変わっていないように思えるが、このカルテラでは大人気のアイテムらしい。それを身に付けたナーゼは、不思議そうにそのミサンガを見ている。

その姿を見て、リユートは思う。

その少女にとっての幸せとは一体何なのだろうか？

幽霊屋敷で出会った少女は鏡を求めた。それと同時に孤独を恐れた。それは、幸せとは程遠い感情。”鏡”を得たところで、それでも幸せには届くとは思えない。

しかし、それはリユートにとっても同じこと。魔王を求める少年の幸せとは、一体何なのだろうか。



## 悪夢 緋い道

月明かりが照らす草原で、その影はたったひとりだった。

影はゆっくり、ゆっくりと歩いていく。その行く先には、途切れ途切れの緋い道が続いていた。

『きつと……きつとこの先に……』

影は呟く。

それは無意識のうちに。まるで何かにとり憑かれたかのように。おぼつかない足取りで、ただ大地に続く緋い道を一步一步辿っていた。

『必ず……必ず助けるから……』

その道の果てはまだ見えず、緋い道はどこまでも続いていた。

しかし、影はその果てがあると信じて進み続けた。

## 1 カーブ・リトアレイン

大樹の村カルテラ

「リユートさん、ネーゼさん。また来てくださいね」

そう言っつて、アンナはリユートとネーゼに満面の笑みを見せる。そのアンナを前にして、リユートは少し名残惜しさを感じる。少し不思議な気分だった。

リユートの隣に立つネーゼの体調はすっかり回復し、二人はこれからカルテラを出発する。

アンナとの挨拶を済ませ、リユート達は背後で待っている馬車に乗り込む。他に乗客はなく、二人が席に座ったところで馬車はゆっくりと動き始めた。

窓から外を見ると、アンナがまだ手を振っている。二人は手を振り返す。そして、いつしかアンナも見えなくなった。

精霊の棲む森ヴァルサ

馬車の向かう先はビラナという町だ。カルテラから馬車で南へ半日といったところに位置し、二人の目的地であるカミツテとは反対方向となる。

直接カミツテへ向かう選択肢もあったが、カルテラからだ馬車でも数日は必要となる。さすがに女の子を連れた旅で、何の準備もないというのは心もとない。その点、ビラナは商業都市として栄えている。これからの旅の準備を考えても、立ち寄っておいて損はない。もちろん、これらのほとんどはアンナの提案だが。

馬車に揺られながら少し経つ。

リユートはネーゼのことを尋ねていた。既知ではあるが、ネーゼの出身はカミツテである。しかし、どうやら幼い頃に少し住んでいただけらしい。父親の仕事の都合でカミツテの外で長く暮らしていたため、おそらくカミツテへ行っても誰もネーゼを覚えていないだろうという話だ。排他的なカミツテの民からすると珍しい境遇、とリユートは思った。

そのネーゼが”カミツテの鏡”を探している。これはリユートにとって不思議であった。しかし、ネーゼはこの理由について語らない。幽霊屋敷にいた理由に関係しているのだろうか？ もしかすると魔王と……。

そこまで考えたところで、リユートは一人静かに首を振る。ネーゼに疑問があるとはいえ、そこに魔王と関連付ける根拠などない。むしろ強引過ぎる思考だ。

そう自覚したリユートは、気分を落ち着けようと馬車の外を見る。鬱蒼とした木々しか見えない。まだ森の中だ。

！

不意に馬車が大きく揺れる。次の瞬間、馬車はその歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

「お、狼です」

「狼……？」

リユートは窓から外を見る。運転手から聞いた通り、そこには多くの狼の姿があった。いずれもヴァルサの森に生息するキッズウル

フだ。しかし、様子がおかしい。

運転手は馬車の中に逃げ込む。それと入れ替わるかのように、リユートは馬車の外へと飛び出す。その手には、鞘から抜かれた剣が握られている。

リユートの脳裏に、一ヶ月前の狼退治の光景が浮かぶ。あの日はたった一匹だったが、今回は五、六匹いる。

「（やるしかない）」

息を呑み、そう覚悟した瞬間だった。狼の一匹がリユートに襲い掛かる。リユートはそれを剣でなぎ払う。なぎ払われた狼は、すぐにその身を反転させる。そして、再びリユートの方を向く。

一筋縄ではいきそうにない。

「リユート……!!」

「駄目だっ!!」

心配だったのか、ネーゼが馬車から顔を出そうとする。しかし、リユートはそれを止める。当然だ。いつ標的になるかも分からない。とはいえ、この状況を乗り切れなければ同じことになる。方策を考える余裕なんてない。今は一匹でも多く倒すしかない。そう直感したリユートは呼吸を整える。

!

それはリユートの背後からだった。不意に狼の一匹が絶叫を上げる。反射的にリユートは背後を振り向く。そこには見覚えのある青年が立っていた。

「やあ、また会ったね」

狼達の警戒を浴びる中、その青年はリユートに笑い掛ける。

「確か、医者を呼んでくれた」

リユートがそこまで言ったところで、青年はその言葉を止めるように手でサインする。

「話は後。ひとまずこの状況を何とかしようよ」

その言葉と同時に青年は剣を構える。リユートは小さく頷いた後、同じく剣を構えた。

ほんの数分程度だろう。青年の協力もあり、無事に狼達を追い払えた。一息ついたリユートは、青年の方を向く。

「助かりました。この間もネーゼの件で助けてもらいましたし、本当にありがとうございます」

「別にいいって。そのネーゼ……って、あの女の子のこと？ 元気になってくれた？」

「おかげさまで」

「よかった。心配だったんだよ」

青年は胸を撫で下ろす仕草を見せる。

「本当は俺も付き添ってあげたかったんだけど、急ぎ旅の途中だったからさ。って、傷薬を買い忘れて、後戻りしている俺がここにいるんだけどね。あ、そういえば、自己紹介していないよね。俺は力

「カープ」

「僕はリユートです。ちょっと待っててください」

リユートは馬車の中を覗く。中にいるのは、ネーゼと運転手だ。運転手はまだ少し警戒している。そして、ネーゼもまた馬車の奥で小さく座り込んでいた。

「ネーゼ、狼はいなくなつた。もう大丈夫だ」

その言葉を聞いた瞬間、運転手は顔を輝かせる。しかし、一方のネーゼはまだ怯えているように見える。あんな状況の後だ。無理もないだろう。そうリユートが考えていたところで、カープが馬車の中を覗き込む。

「初めまして。ネーゼちゃん、でいいんだよね？俺はカープっていうんだ。よろしく」

「……ネーゼシアンです。よろしくお願いします」

ネーゼはぎこちなく返事をする。こちらは狼の影響ではなさそうだ。どうもネーゼは人見知りのようである。それを気にすることなく、カープはすぐにリユートへと視線を戻す。

「ねえ。この馬車って、もしかしてカミツテ行きだったりする？

いや、ネーゼちゃんってカミツテの民みたいだしさ」

「そうです。でも、その前にピラナへ立ち寄りますけど」

「そっか」

カープは少し考え込む。

「実は、俺もカミツテに用事があるんだ。歩きながら馬車を捕まえ

ようと思つてたんだけど、ちょうどいいや。俺もこの馬車に乗つてくれない？ これも何かの縁だしさ」

そういえば、カープの目的地のことはアンナからも聞いていた。リユートは少し考えるが、特に断る理由はない。

「僕はいいですよ。ネーゼは？」

その質問に対して、ネーゼはおどおどしながら頷く。

「そんなに緊張しなくたって大丈夫だよ。俺って、こう見えてもかなり紳士だからさ。別に襲つたりなんかしないって。ね？」

「……はい」

そんなやりとりに笑いながら、カープは馬車に乗り込んだが、すぐに顔を出す。

「そうそう。敬語つてどうも苦手なんだよね。打ち解けられないっていうか。せつかくの楽しい空気が台無しになっちゃうしさ」

そう付け加えた後、カープは馬車の奥へと入っていった。

(カープ・リトアレイン)

カミツテへ向かうその青年を加え、馬車は再び先へと進む。

時は進み、いつしか空は薄暗くなっていた。そして、馬車の進む先には、灯の生み出す道が見え始める。その先にあるのは光の集落、商業都市ピラナである。

## 2 ビラナの酒場

最果ての商業都市ビラナ

「……」

気持ちのよい夜風が吹く。

リユートは振り返る。そこに見えるのは、今日宿泊している宿だ。石造の建物に、いくつもの窓が並んでいる。その一つ、ネーゼの部屋の灯りは消えている。もう眠りにについているのだろう。

リユートは街路に目をやる。もう二十一時を過ぎようかという時刻にも関わらず、まだ道行く人の姿は途絶えない。先日まで滞在していたカルテラとは大違いだ。

商業都市の名前通り、ビラナは商業が発展した華やかな街である。昔は小さな村だったらしいが、首都バリプレートから続く鉄道の完成後に急発展を遂げた。

特に目に付くのは、ローブ姿の学者達である。中には、首都バリプレートが誇る王立研究所から訪れている学者もいる。この地域には多くの精霊伝説が残っており、彼らはそれを目的に訪れているのだ。このような環境のため、必然的に学問も発展し、バリプレートに次ぐ第二の学術都市という顔も持っている。

リユートはゆっくりと歩き出す。

まだ体調の優れないネーゼを一人残すのは心苦しいが、夜間の数時間だけだ。大丈夫だろう。そう思ったリユートに声が掛けられる。

「よっ！」

その突然の声に、リユートは思わずその方を向く。そこに立って



いたのはカープである。

「どこへ行くの？ 夜遊びだったら、俺も付き合っけど？」

小さく息を吐き、リュートはその問いに答える。

「酒場だよ」

「へー、酒場か。だったら、誘ってよ。いい店を知ってるんだ。わりと新しい店なんだけど、オーナーがこだわってね。いい酒を出すんだ。お洒落だし、女性人気も高いし。噂話も豊富だと思うよ」

正直なところ、リュートにとって酒はどうでもいい。だが、噂話が豊富な点には惹かれる。リュートの求める”噂”を得られるかもしれない。

そのとき、リュートはふと思い出す。カープは亡霊騒動の件で活動している。馬車の中ではネーゼに気遣ってその話題に触れなかったが、この機会にその話を聞いておいてもいいだろう。魔王への手掛かりが何か掴めるかもしれない。

そう思いながら、リュートは先導するカープに続いた。

鈴の音が響く　　が、それは同時に聞こえる騒がしい声にかき消された。かなり繁盛しているようだ。

薄暗い店内を照らすのは、所々にある古風なランプ。その配置、明るさの加減は絶妙で、まるで異世界を訪ねたかのように錯覚させられる。

リュートは店内へと進む。開放された小部屋から中の様子が伺える。確かに客層は広い。その一方で、やはり目立つのはローブ姿の学者達だ。中には学生と思われるような客もいる。また、カープの

言う通り、女性客が多い印象だ。夜中まで女性が酒場に立ち寄れる。これは、このビラナの治安のよさを意味しているのだろう。

奥まで進むと、そこは大部屋になっており、いくつものグループ達が盛り上がっていた。その中を進み、二人はカウンターの目の前まで到着する。

「いらっしやい」

カウンターの中にいた小洒落た服装の男性が、お約束の営業スマイルで声を掛けてくる。

「やあ、ジャックさん。また来たよ」

「ははは、カミツテに行ったんじゃなかったのか？ やけに早いね」「いや、ちよつと縁あつてね。ここにいるリユートと一緒に歩くことにしたんだ。リユート、紹介するよ。ここのオーナーのジャックさん」

リユートは一礼をした後、再びジャックを見る。

見た目は三十代半ばといったところか。店主にしては若い印象を受ける。左の薬指には指輪が見える。どうやら既婚者であるらしい。

リユートの視線に気づいたジャックは、爽やかに笑い掛ける。

「リユート君、でいいのかな？ いらっしやい。私はジャック。以後、うちの店をよろしく頼むよ」

「はい。こちらこそ。あの、カープとは知り合いですか？」

「ははは。客と店主の関係だよ。とはいえ、この店に訪れてくれたんだ。その縁は大切にしないとね」

「ジャックさん、話好きでこの店を開いたんだ。お客様は友達だつて、そんな感じだよ。そんな雰囲気もあつて、女の子のお客様も多いんだよなあ」

そう言いながら、カープは酒場を見渡す。その視線の先は、店の中の女性達。どう見ても不審人物だ。頼むから巻き込まないでくれよ、とリユートは心の中で呟く。

その様子を見て、笑いながらジャックはリユートに話し掛ける。

「それで、リユート君。何か飲みたいものはあるかい？」

「りんご酒はありますか？」

「もちろん。材料は豊富だからね。カープはどうする？」

「そうだなあ。あ、ビール頼みます。この間のレモンテイストなやつ」

「はい。かしこまりました」

ジャックは手際よく、注文の飲み物を用意する。そして、洒落たグラスにそれを注ぎ、二人に差し出した。リユートはそれを受け取り、一気に飲み干す。

りんごの風味が口中に広がる。心地よい甘さ。すっきりとした後味。そして、適度なアルコール加減。思わず、リユートの口から言葉が漏れる。

「おいしい……」

「だろ？ ジャックさんは、ビルナードの外で開かれている世界コソテストで入賞してるんだ。言ってみれば、世界認定の味さ」

カープはビールを飲み干す。その表情、仕草には何か達成感のよくなものを感じる。大げさすぎる気もするが、やはりそちらの味も極上なのだろう。

「もう一杯いくかい？」

「お願いします」

笑い掛けるジャックに、リユートはグラスを差し出す。  
そのときだった。リユートは隣に強い存在感を感じる。咄嗟にその主を確認しようとする。しかし、それより先に大きな音が響く。その音源には、明らかに特注の巨大な木製カップが置かれている。そして、それを置いた主は、大きく、力強い声を発した。

「ジャック。こっちもだ。ぶどう酒を追加で頼む」  
「分かったよ。ちょっと待っていてくれ、ハイン。それにしても、これで何杯目だ？ 今日随分と景気がいいじゃないか」

ジャックは手早くリユートのグラスを手取る。そして、りんご酒を注いでカウンターに置いた。その間にも、ハインと呼ばれた大男はジャックとの会話を続ける。

「まあな。でかい仕事が終わったとこだしな。どうせ帰ったら子守りで飲めねえんだ。今がチャンスってわけよ」

「ははは、アミスちゃんのことかい？ そんなこと言っていると、今度言いつけてやるぞ？」

「おいおい、そいつは勘弁してくれよ」

ハインが大声で笑っている間に、ジャックはぶどう酒をカップに注ぎ始める。巨大なカップだけあって時間がかかる……これを何杯も？ と、ついつい視線を奪われるリユート。その様子にハインが気づく。

「よお、そんなにあのカップが気になるか？ ははは、俺との飲み比べに勝てたら譲ってやるよ。どうだ？」

「い、いえ……」

リユートは慌てて首を振る。

……無理だ。絶対に勝てる気がしない。リユートの心の声が聞こえたのか、ハインはさらに大声で笑った。

「ハイン。大切なお客さんなんだ。あんまりからかわないでくれよ」  
「ああ、悪かった」

笑いながら、ハインはぶどう酒の注ぎ終わったカップを手取る。そして、すぐにその場を離れていった。安堵なのか、リユートは溜息を漏らす。

「すごいのがいたな」

同じく気になったのだろう。カープはまだハインの方を見ている。

「ああ、ハインか。たまに来るんだ。実際にすごい奴だよ。」ギルドのハイン” って知らないかな？ その筋じゃ有名な奴だよ。数ある賞金ギルドの中でも最強ってね」

「あ、名前は聞いたことある。そっか、確かに強そうだなあ」

「でも、根は優しい奴なんだ。元は騎士らしいしね」

「それは嘘でしょ？」

その視線はまだハインを捕えている。一際目立つその存在は、少なからず二人の心に焼き付いた。

### 3 魔王を信じる男

ビラナの夜は更けていく。

町の明かりは、一つ、また一つと消えていく。先ほどまで灯っていた研究所の明かりの数も少なくなっている。もつとも、このいくつかは朝まで灯っているのだが。

その一方で、闇夜に似つかわしい大きな汽笛が聞こえる。バリブレート行き最終列車は、これから三、四時間を掛けて首都へと乗客、荷物を運んでいく。

そのいつもと変わらないビラナの夜は、ジャックの酒場にも訪れていた。

酒場は盛り上がっている。カープの周りには、いつの間にかその飲み仲間達も集まっていた。

「ははは、カープ。お前もいい加減にしとけよ」

「本当だ。王国様の依頼で寄り道なんて罰が当たるぞ？」

「人聞き悪いなあ」

楽しそうに笑いながら、カープはグラスに残っていたビールを飲み干す。そこへリユートが戻ってくる。

「あれ、用事は終わったの？」

リユートは黙って頷き、そしてカウンターに座る。飲み仲間達に手を振りながら、カープはリユートの隣に座る。

「なんか暗いなあ。お目当ての”情報”は手に入らなかったの？」

「聞いてたのか？」

「いや、そりゃ同じ部屋の中だしね。何か情報を集めていたことくらいは分かるよ。もしかしてネーゼちゃんにも関係するの？俺でも協力できそうだったりする？」

リユートは少し考え込む。魔王についてであれば、先ほど世間話の中で少し触れた。カープも魔王の情報については持っていない。これ以上の話は無駄であろう。

リユートは、ネーゼの探している鏡について尋ねることにする。

「もしかして”鏡”に関係するのかな？」

一瞬、リユートの耳から酒場に溢れる雑音が消えた。さらに、リユートの口から出掛かっていた言葉も奪われる。そのリユートを見て、質問の主であるカープはさらに続ける。

「いや、まさか本当だとはね。偶然って怖いねえ」

カープは頭を掻きながら笑う。それ見て、ようやくリユートは言葉を取り戻す。

「どうして”鏡”を探しているって思ったんだ？」

「いや、ただの勘だよ。ほら、ネーゼちゃんってカミツテの民でしょ？それに、ちょうど俺が今関わっている仕事と重なってたし」

リユートはカルテラでアンナから聞いた話を思い出す。カープは”首都バリプレート”からの依頼で”カミツテ”へ行く途中である。その理由は”亡霊騒動”だ。

リユートはそれらのキーワードと”鏡”との関係を考えてみる。そのとき、リユートは”ある鏡”のことを思い出した。そして、その記憶と重なるかのようにカープが言葉を続ける。

「そういえば話してなかったよね。千年遺跡の鏡。それが原因の亡霊騒ぎを解決するってのが俺の仕事なんだ。で、カミツテへ行くのもその都合なんだ」

#### 千年遺跡の鏡。

かつて魔王アティラスが所有したとされることで有名だ。千年遺跡はバリプレートの名所でもあり、その鏡についてリユートも話には聞いたことがある。しかし、ただの観光地、とそれほど重要視はしていなかった。

さらに、その鏡とネーゼの関係を考えようとする。そのリユートの目の前に小皿が差し出された。その上には、この地方特産の鳥の燻製が乗っている。

「それは私の奢りだよ」

そう言いながら、ジャックが笑いかけてくる。

「何の話をしてたんだい？」

「ジャックさん。いやね、亡霊騒ぎの話をしていたところなんだ。あ、この鳥ありがとう」

カープは燻製の一つを手でつまむ。

「へえ。そういえば、あの事件も大変なことになってきたらしいね」「えー!？」

バリプレートから依頼を受けていたはずのカープが驚きの声を上げる。口に入れていた燻製を一瞬喉に詰まらせかけるほどだ。それを見てジャックは笑う。



「その様子だと、何も知らないようだね」

「どんなことになっているの？」

「あの天才騎士エレヴァ・クレシアが動くらしい」

「ええっ！？ エレヴァさんが！？」

カープは身を乗り出す。今にも立ち上がりそうな勢いだ。

ジャックから出たその名前。エレヴァ・クレシアといえば、この地方であれば誰もが知っている。

もつとも有名になったのは、ここ二、三年となる。まだ二十歳前後の女騎士が、歴代最年少で副団長に抜擢されたことで、ビルナー中が大騒ぎになった。武力・知性・人望・統率。どれをとっても卓越しており、今では騎士団の顔となっている。

「その噂を聞いたのは昨日だし、何か緊急事態でもあったのかもね。ここ一ヶ月は魔物の噂も多いし、少し怖いくらいだよ」

「そうですね。俺も仕事を急がないと」

そう言っつて、カープは手元のグラスの中身を飲み干す。そして、何やら強く気合を入れる。

一方のリユートも、エレヴァ・クレシアほどの有名人が動く事件については気になる。さらに、アンナから聞いていた話では、カープは女神様の力を借りようとしていたはずだ。

「その亡霊事件だけど、カープはどうしてカミツテへ行くんだ？」  
「女神様の泉へ行きたいんだ。鏡の暴走を抑えるのに、その泉の水の力を借りるってわけ」

カープの話によると、鏡の暴走はこれまでも数回発生しているらしい。もちろん今回と比べると小規模であり、そのため一般にはあ

まり知られていない。そして、そのときに解決策として考えられたのが女神様の泉の水となる。

魔王の鏡だから女神様の力で。そんな気休め程度の案ではあったものの、大方の予想に反して効果が出てしまった。このため、それが現在まで続いているとのことだ。

そこまで聞いたところで、リユートの頭に”ある単語”が流れる。そのときだった。

「よお」

不意にリユートの思考を遮る声が聞こえる。リユートはその声の主を見る。そこにいたのは見知らぬ男であった。少なくともリユートはその男のことを思い出せない。見れば、その男はかなり酔っ払っている。人違いということも考えられる。

「失礼ですが、どちら」

「まだ探してんのか？ 魔王」

その言葉でリユートは理解する。まだ顔は思い出せないが、以前に魔王の情報を尋ねた人物の一人だ。

リユートは言葉を出せず、ただ黙っている。それを見て、その男は調子付く。リユートの肩を叩きながら、さらに言葉を続けた。

「はは、魔王復活なあ？ あんなのただの噂だ」

！

そのとき、男の背後で、まるで大地が揺れんばかりの大きな音が

聞こえた。

その音に驚き、その男だけではなく、酒場中が静まり返った。小部屋からこちらを覗く者もいる。会話を続ける者など誰一人いない。その静寂の中、そこにいる全員の注目を集めて、その中心にいる男は一言だけ重く、そして強く言い放った。

「俺は……信じる！」

その男は立ち上がり、すぐ横の壁に立て掛けていた巨大な大剣を手取る。そして、ゆっくりとカウンターに歩き始めた。

まだ誰も言葉を発せない。

その風貌。その空気。そして、ギルド最強の名。

それらを併せ持つ”ギルドのハイン”という男の動向に、等しく全員が釘付けとなった。

「ジャック、悪いな。白けさせちゃった」

小さく響く金の音が終わった後、ハインはカウンターに背を向ける。

「釣りはいい。もし足りなかったらツケといてくれ」

そう言い残し、ハインはゆっくりと出口へと向かっていった。その姿が消えてからも、しばらく酒場は静寂のままだった。

「今のは……？」

その眩くかのようなリユートの問いに、ジャックが答える。

「ああ、ハインなら気にしないでくれ。あいつの悪い癖だよ」

「……」

何を思い立つたか、リユートは無言のまま代金をカウンターに置く。そして、そのままハインを追った。呼び止めるジャックとカープの声もリユートには届かない。

ただ夢中だった。

「待ってくださいっ！」

「ああ？」

呼び止める声にハインは振り返る。

「何か用か？」

「もしかして魔王を探しているんですか？」

再び空気が張り詰める。心臓の鼓動が聞こえる。

「だったら何だ？」

「……僕も、探しています」

その言葉は再び静寂を呼ぶ。

この日、この時、この瞬間。魔王、その幻を追う二人は互いの存在を認識することになる。

## 4 女神の大地

この地方を代表するヤス山脈。その荘厳な風景は、全ての客人を魅了する。麓を流れる川のせせらぎは心地良く、また空を翔る鳥はまるで天の使いのようである。さらに、バリプレート地方とこの地を二分するその様は、まさに大地の番人と呼ぶのにふさわしい。そして、その麓に一つの集落が映る。それがカミツテだ。

目的地がバリプレートと分かったリユートとネーゼにとって、この土地はただの寄り道でしなくなっていた。しかし、カープの話によれば、千年遺跡は現在封鎖中であり、一般人の立ち入りは禁じられている。亡霊騒動ということを考えれば、当然の状況だろう。これに対し、カープの協力者ということであれば話は別になる。カープの方からバリプレート側に話を通してくれるらしい。もちろん確実というわけではないが、それでも可能性があるに越したことはない。

それに、カミツテへ行くことは、リユートにとってメリットがある。追いかけている”情報”について何か得られるかもしれないからだ。

一方のネーゼも、特に異論を挟むことはなかった。

『鏡の場所へ行けるのなら』

その一言だけを発し、ネーゼはカミツテ行きを受け入れた。

そのネーゼは静かに馬車の外を見つめている。何かを考えているようにも見える。おそらく久しぶりに訪れる故郷を懐かしんでいるのだろう。そう考える一方で、リユートにはもう一つ気になっていることがあった。ギルドのハイン。リユートと同じく魔王を追う存

在。

そのようなことを頭に浮かべている間にも、馬車はゆっくりとカミツテへ近づいていく。

### 女神の大地カミツテ

村に入った途端、リユートは少し驚かされることになる。

そこに映るのは金色の瞳をした村人達だ。それはネーゼと全く同じであった。以前にも訪れたことはあるものの、慣れないリユートには不思議な光景であった。一説によれば、この瞳の原因は、カミツテの風習となつてゐる女神の泉の水による産湯であるらしい。あくまで一説であり、その真偽を知る者などいないのだが。

その一方で、ネーゼは静かに村の中を見回していた。テント風の家。そよ風に揺れる干されたキルト。そして、民族衣装を着て歩く住民達。しばらく見回した後、今度は川辺で遊んでいる子供達をじつと見つめた。

そのリユート達に村人の一人が気づき、こちらに近づいてくる。それを見たカープも村人の方へ歩いていく。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは。よく来たな、カープ殿。今日は連れもいるよ。うだが、また女神様の泉の件か？」

「はい」

その返事に、村人は一瞬その言葉を止める。

「前回からそれほど時間が経っていないな。悪い前触れでなければいいが」

「そうですね。さすがに今回はまずいみたいですね」

そうか、という仕草を村人は見せる。それは、カミツテが排他的であることを忘れられるくらい自然なやりとりだった。

「長老様は本日外出されていないはずだから、そのまま訪問するといい。ところで」

先ほどから気になっていたのだろう。村人はネーゼを見る。

「彼女は？ 見ない顔だが、外住者か？」

「そうらしいですよ。その鏡の件で一緒に行動しているんです」「鏡の件で？」

村人は再びネーゼの方を見る。そして、少し考え込むような仕草を見せる。

リユートはしばらくそのやりとりを見ていた。しかし、ネーゼの話題が出たところで、ネーゼの方に視線を向ける。ネーゼはまだ川辺の方を見つめている。

「ネーゼ、やっぱり懐かしいのか？」

「え？」

突然の質問に、ネーゼは少し驚きを見せる。

「……はい。この空気は昔と同じで、とても懐かしいです。それでもいろいろと変わってしまいました」

ネーゼの声は少し寂しげであった。リユートは村を見渡してみる。それほど変化しそうでない村だが、故郷の者であればそう思うもの

なのか。そう考えているところへカープが戻ってくる。  
そのカープに先導され、リユート達は長老の家へと向かった。

「話は分かりました」

目の前に座る老人はそう返事した。

フィスク・ラ・ヴァンダ。このカミツテを治めている人物だ。その両側にそれぞれ座る二人の付き人と比べるとよく分かる。老齢ながらも、一際威厳を感じさせる瞳。さすがはこのカミツテの長といったところだ。

その老人ヴァンダは言葉を続ける。

「女神様の泉へ行く許可を与えましょう。ですが、今日はもう遅い。しばらくすれば日も暮れるでしょう。出発は明日の朝ということでよろしいですか？」

「はい」

「それでは、本日はここで休んでください。すぐに部屋を用意いたします」

そう言った後、ヴァンダは立ち上がる。それに付き人の一人も続く。そして、ヴァンダを奥へと連れていった。残った一人の付き人は、こちらに向かって深々と礼をし、そして口を開く。

「しばらくこちらでお待ち下さい。部屋の準備が整いましたらお呼びいたします。また、夕食もご用意いたしますが、もし事前に何か食されたいとのことでしたら、そちらにある果実をご自由に召し上がってください。それでは、私もここで。何かありましたら、そちらのベルでお呼び下さい」



立ち上がった付き人は、再び深々と礼をして奥へと入っていった。その足音が遠くなっていく。

「いやあ、堅苦しかった。毎回のことながら、疲れるんだよね」

そう言いながら、気の抜けた表情でカープは寝転がる。しかし、その視界にネーゼが映ると慌てて態度を変える。

「い、いや……別に悪い意味じゃないんだよ。ただ……ちよつと俺には合わないなって。な、リユートもそうだろ？」

とんだ飛び火だ。だが、カープは”話を合わせてくれ”という視線を必死にリユートへと送る。それに負けたリユートは小さく息を吐く。

「まあ、僕もそんなに得意な方じゃないな」

「だろ？」

それを聞いて、カープは安心感を見せる。そして、すぐにネーゼの様子を伺う。

「……」

無言のままだ。

……まずい、怒らせたかな？ そのような様子でカープは狼狽える。一方のリユートは、まさかといった様子でネーゼを見る。ネーゼは先ほどから動かない。

！

刹那の瞬間。

部屋の空気が張り詰める。それはあまりに唐突で、リユートも力  
ープも動けなかった。思考が追い付く。それと同時に、視線の先  
は倒れているネーゼが映る。

「ネ、ネーゼ……？」

リユートは何とか声を出す。しかし、その声に対して返事はない。  
また無理をしていたのか。そう思考が働いた瞬間、リユートは近  
くにあったベルを力強く鳴らした。

そこは見慣れない暗い部屋。  
わずかに照らされる灯りは、そこに立つ二人の存在を映し出す。

『嫌です……』

少女は呟いた。  
それはわがままであった。ずっと我慢してきたわがまま。  
しかし、目の前の男は、聞こえたはずの言葉をただ流す。

『目が覚めたときには全て終わっている』  
『嫌ですっ！』

少女は男にしがみつく。

『分かってくれ。これしかないのだ』

男は少女を抱きしめる。その手は震えていた。  
そして、少女の髪を撫でる。

『目覚めたときには全てが終わっている。そこで幸せに生きてくれ、  
ネーゼ』

その言葉の後、少女の意識は途切れた。

## 5 女神の洗礼者は現れた

### 泉への道

「それにしてもネーゼちゃん達はもったいないよね。女神様の泉を見られるせつかくの機会なのに」

「見世物ではない」

カープの言葉に、話し掛けられた青年はそう返す。

名前はレウス・ラ・ハウク。年齢はカープよりやや下なのだが、その風格は遥かに年上を感じさせる。しきたりを重んじるカミツテならではといった青年だ。着こなす民族衣装は、さらにその威厳を強めている。

カープは何度か女神の泉を訪れているが、毎回このハウクが案内人として同行している。とはいえ、女神の泉への道のりは単純である。カミツテへと流れる川に沿った小道をそのまま進むだけでよい。どちらかというと、部外者が不審な行動をとらないための監視人という方が正しいだろう。

「分かってるって。それにしても、毎度毎度お前も大変だよな」

「不満はない。」鏡”が関わっている。これはカミツテの責務だ」  
「相変わらずお堅いことで」

話をしているうちに、鬱蒼とした木々のある山へと入る。しばらくしてその視界が開き、大きな泉が姿を現した。

### 女神の泉

「何度来ても、何ていうか心が安らぐよなあ」

カープは泉を覗いてみる。岸边ではあるものの、泉の底は見えない。まるで世界の果てまで続いているかのようにであった。

「ここは神聖な場所だ。用事を済ませたら、すぐに帰るぞ」  
「はいはい」

力の抜けた声で返事しながら、カープは上着のポケットから小瓶を取り出す。カープが小瓶に水を汲んだことを確認すると、ハウクはすぐに口を開く。

「さて、用事は終わりだな。帰るぞ」

「いつもながら……。はあ、もう少しこの光景を楽しみたいね」

そのカープの呟きを無視して、ハウクは帰路につこうとする。のんびりする暇など与えるつもりはないようだ。

やれやれという仕草をして、カープはハウクに続こうとする。そのとき、先を進むハウクの足が止まる。別にカープを待っているわけではない。

立ち止まったハウクは注意深く辺りを見渡す。一方のカープも何かに気づき、その手で腰の剣を拵んだ。

「何かいる……よな」  
「間違いなくな」

不意に大きな鳴き声上がる。そして、近くの茂みから二匹の猿が奇声と共に飛び出してきた。かなり気が立っている。

「これは……？」

「勘弁してくれって。こんな凶暴な奴がいるなんて聞いてないし」  
「つべこべ言うな。追い払うぞ」  
「余計な労働だよ」

カープの愚痴を無視して、ハウクは手に持っていた杖を構える。そして、飛び掛って来た猿にその杖を叩きつける。狩猟を生業としているためか手馴れている。

「さっすが」

そう言いながら、カープも猿を剣で斬りつける。それでも猿達は怖気つく様子を見せない。

「けっこう厄介だなあ」

「これもまた鏡の影響か。ここまで動物達に影響を与えるとは」  
ハウクは再び襲い掛かる猿を杖で叩きつけると、泉の方へ駆け出した。それを見たカープは、急いで先ほどの小瓶をポケットから取り出す。

「そうだった。忘れてた」

カープは小瓶の栓を開け、中の水を猿の一匹に向けて振り掛ける。水に濡れた猿はすぐに大人しくなった。そして、傷の影響なのか、そのままその場へと倒れた。

「そりゃ、あの鏡の影響ならこうすればいいんだよな」  
「そういうことだ」

そう言うと、ハウクは泉に手を沈める。そして、襲い掛かってき

た猿に水を掛けた。先ほどと同様、その猿も大人しくなった。

「これで落ち着いたかな？」

「おそらくはな」

ハウクはカープに近づく。そして、カープの傍で倒れている猿に向けて手をかざした。

突然ハウクの手が輝く。あらゆる傷、病を癒すとされる”カミツテの奇跡”だ。猿の傷はみるみる回復する。そして、傷の完治した猿はそのままどこかへと去っていった。

「さすがにお優しいことで」

「カミツテは自然と一体。それにあの猿に罪はないのだ」

「それにしても困ったもんだなあ。ここに来る途中でも狼の群れがあんな感じでさ。特に、ここ一ヶ月はおかしいよ」

カープは再び女神の泉から水を汲む。それを見ながら、ハウクは静かに話す。

「三年前、女神様の泉は輝きを見せた。やはり何かが起きているのかもしれないな」

#### 女神の大地カミツテ

「まだお休みのようです。今はゆっくりとするのが一番でしょう」  
「そうですか」

リユートの返事を聞いた後、カミツテの女性は再びネーゼの眠っている部屋へと入っていった。

昨日に倒れてから、まだネーゼは目を覚ましていない。聞くところによれば、随分とうなされているらしい。

「……」

部屋の戸は閉じられている。その戸を少し見つめた後、リユートはその場を離れようと振り返る。そのとき、そこに長老ヴァンダが立っていることに気づいた。

「随分と心配されているようですね」

「はい」

「ネーゼシアン殿と言いましたかな？ 何かの病気というわけではありませんよ。ただ少しお疲れのようですね。もうしばらく休ませた方がよろしいでしょう」

そう言って、ヴァンダは奥の広間へと進む。もう一度ネーゼの部屋の方を見た後、リユートも広間へと足を進めた。広間の奥にはヴァンダが座っていた。

「さあ、遠慮せずに座りなされ。もうしばらくすれば、カープ殿も戻ってくるでしょう」

促されるままにリユートは座る。昨日と同様、その自然なやりとりは、以前に門前払いを受けた村ということのを忘れさせる。リユートの口が自然に開く。

「あの、一つ尋ねてもいいでしょうか」

「何ですか？」

「ネーゼは”鏡”を探していました」

「”鏡”を、ですか？」



「はい。その鏡はカミツテのもので、さらにその鏡で亡霊騒ぎが起きています」

ヴァンダは静かにリユートの瞳を見つめている。

「ネーゼはカミツテの人間。そのネーゼが鏡を探している。これには何か意味があるのでしょうか？」

その問いに、ヴァンダは一呼吸置いて答える。

「それは私にも分かりませんな。ネーゼシアン殿の個人的な理由によるものでしょう。あれの管理はバリプレートに任せているのですから」

それを聞いて、リユートは肩を小さく落とす。強く期待していた回答があるわけではない。だが、何故かその回答に期待外れといった感覚を受けた。

そのリユートを見て、ヴァンダが問い掛ける。

「それだけですかな？」

まるでリユートの心を見透かしたかのような質問。いや、肩を落とすリユートを見れば、誰だってそう思うのかもしれない。

リユートは再びヴァンダの方を見る。

「もう一つだけ聞きたいことがあります。この鏡の事件、その……  
”魔王”が関わっていたりするでしょうか？」

一瞬の静寂。

その間、ヴァンダはリユートの瞳を見つめ続けていた。強い金色

の瞳。だが、リユートは気圧されることなく見つめ返す。

「ただの好奇心とは違つようですな。事情までは問わないでおきましよう。それで質問でしたな？ はっきりとは申し上げられませんが、その可能性はあるでしょうか？」

リユートは思わず目を見開く。自身の手が震えるのを感じる。

「何かご存知なのですか？」

「いいえ。可能性がある、ただそれだけのことです。女神様の伝説はご存知ですな？」

「はい」

「その中に登場する女神様の戦士。”洗礼者”とも呼ばれますが、その者が現れた兆候がありました。ちょうど三年前でしたかな。女神様の泉が不思議な輝きを見せました。まさに文献にある通りに」と、いうことは「

ヴァンダは頷くことなく、リユートの瞳を見る。そのとき、広間の外から誰かの声が聞こえる。続いてカープの声も聞こえる。

「話はここまでですな」

そう言うと、長老は”ハウク”という名前を呼んだ。少しして、ハウクとカープが広間に入ってくる。

「ただいま戻りました」

「はあ、全く疲れましたよ。お、リユート。ネーゼちゃんはどうか？」

リユートは静かに首を振る。それを見たカープは、がっくりと頭

を下げる。

そのやりとりの間に、ハウクはヴァンダの前に座り込む。そして、泉で遭遇した猿の件を報告した。ヴァンダは黙ってその報告を聞き、少し考え込む。

「カミツテとしても、そろそろ動いた方がよいかもしれんな」

そのヴァンダの言葉に、ハウクは黙ったまま頷く。それを確認した後、ヴァンダはカープの方を向く。

「カープ殿、お願いがあります」

「はい。何ですか？」

「このハウクを鏡の場所まで同行させてください」

「ええ？」

「あの鏡はもともとカミツテのもの。カミツテの民として、その状態をハウクに確認させたいのです」

「うん。まあ、俺は別にいいんですけど。リユート、判断は任せるよ」

リユートもハウクの同行に同意する。先ほどのヴァンダの話もあり、リユートの中で”目的”への期待が膨らんでいた。そのリユートへハウクが声を掛ける。

「そちらの客人に挨拶はまだだったな。レウス・ラ・ハウクだ。短い間となるが、よろしく頼む」

「僕はリユートです。こちらこそよろしく申し上げます」

(レウス・ラ・ハウク)

若くして、カミツテで最高とされる癒術の使い手である。そのハ

ウクは長老ヴァンダの信頼を受け、リユート達とバリプレートを目指すこととなった。

その夕刻にはネーゼが目覚めます。まだ不安は残るものの、目立った問題はなさそうだ。その翌日、リユート達は”鏡”の待つバリプレートへと出発した。

## 悪夢 二つの世の地獄

『うわあっ！』

村のあちこちから悲鳴が聞こえる。

若い少年は、ただ目の前の光景を見つめるだけであった。

突然村を襲った獣の群れに、多くの人々が殺された。

いつも遊んでいた友達。いつも買い物した店のおじさん。そして、少年の両親。

当たり前のように生きていた人達が、当たり前のように死んでいく。

涙はなかった。

いや、その理解を拒否していただけなのかもしれない。

少年は、瞳を大きく見開いたままその光景を見つめ続けた。

それはまるで地獄のようであった。

## 1 ギルド”置き去りの時計”

「まいったな」

そう呟いたのはカープである。

四人は現在ヤツカテルという町に滞在している。ピラナから列車で二時間といったところにある町だ。

ここに留まっているのには理由がある。ヤツカテルと次の駅町であるハルデイとの間には、ヤス山脈が広がっている。このヤス山脈を通り抜けるトンネルが、土砂により埋もれてしまったのである。これにより、列車の出発は見送られることとなった。

### 山門の町ヤツカテル

四人は宿内の騒がしい食堂で、少し早めの昼食をとっていた。

「このタイミングで土砂ってきついなあ。一昨日だったらよかったらしいのに。ついてないよ。日頃の行い、悪くないと思うんだけどなあ」

そう言うのは、首都バリプレートからの依頼後、散々”寄り道”をしてきたカープである。その事情を知らないハウクは冷静に返す。

「だが、亡霊騒動という事態を考えれば、のんびりと待つわけにもいかないだろう。急いでバリプレートへ向かうべきだ」

「とは言ってもなあ。復旧まで数日レベルじゃないらしいし」

「復旧まで時間が掛かるのであれば、ヤス山脈を越えればいい」

「ヤス山脈だったって……」

カープはちらりとネーゼの方を見る。

「私は大丈夫です」

カープの心を読んだかのように、ネーゼは返事をする。だが、ここ数日で二回も倒れている。それを知るリユートは、ネーゼの返事をそのままに受け入れられない。

「ネーゼ、無理はしない方がいい。ヤス山脈を越えるのは二、三日掛かりになる」

「本当に大丈夫です」

ネーゼはきつぱりと返事する。よほど鏡の場所へ急ぎたいのだから。

「決まりだな。今日中に準備を整えて、明日にはヤス山脈へ向かう」

そのハウクの言葉に対して、カープは力の抜けた声を出しながら机に頭を当てる。よほど登山が嫌だったのだろう。

しかし、山越えといっても、実際それほど険しい道のではない。交通期間が発展する前は、バリプレート方面へ行くにはヤス山脈を超えるしか手段がなかった。そのため、登山道はしっかりしており、また途中には休憩地点がいくつもある。最近でも旅行者の登山名所となっており、道は整備されたままである。

ネーゼを気遣いながら進んだとしても、一日もあれば中継地点にあるシルクという村に到着できるだろう。それに、いざとなればハウクの”カミツテの奇跡”もある。

それらの安心材料により、リユートも山越えに同意した。

食事の後、リユートは一人でヤツカテルの町を歩いていった。

ヤス山脈へ向かうのは翌朝となる。山越えの準備は宿に依頼しており、出発まで時間が空いていた。

カープは少し寄りたい場所があるらしく、一人でどこかに出掛けていった。また、ハウクは容態の分からないネーゼと一緒に宿へ残った。そして、残るリユートは、カープと同じく自身の用事のために出掛けていた。

その目の前には一軒の建物がある。リユートはポケットから一枚の紙を取り出す。そこには、この建物の場所を示す地図、そして”ある言葉”が書かれていた。

### ギルド『置き去りの時計』

この地方には何種類ものギルドがある。商売人達が情報を交換する商人ギルド。専門の技術者達が仲間と切磋琢磨する職人ギルド。数あるそれらのギルドと比べると、同じギルドの名をしても目の前のそれはやや異質であった。

賞金ギルド。その名が示す通り、賞金稼ぎのためのギルドだ。魔物退治から迷子の搜索までと、その依頼の幅は広い。その意味では一般人にも馴染み深いギルドである。

その一方で、依頼の幅は”表”の世界だけではなく、”裏”の世界にまで広がっていることが多い。殺しの依頼もあり、その筋で有名なギルドも存在する。このため、一部の賞金ギルドは世間から嫌煙されている。

幸いなことに、リユートの目の前にあるギルドに対して、そういった類の噂は聞かない。とはいえ、かの有名な”ギルドのハイン”を擁するギルドに、そのような依頼がないとも思えないが。



『……僕も、探しています』

ピラナでの夜、リユートとハインはそれ以上の言葉を交わさなかった。その代わり、ハインは一枚の紙をリユートに渡した。先ほどリユートが見ていた紙である。目的を同じくする仲間同士、情報交換をしようといったところだろう。

もっとも、現在ヤツカテルにいるのはただの偶然であり、さらにハインがこの場所にいつ現れるのかもリユートは知らない。

リユートは小さく深呼吸をし、そして建物のドアを開いた。

内部はリユートが思ったよりも明るかった。白を基調とした壁紙に、光の差す大きな窓。何も知らなければ、少しお洒落なカフェテリアと勘違いしてしまいそうだ。一般人の訪れもあることを考えれば、こんなものなのかもしれない。

そして、さらに意外なことに、カウンターの奥から出てきたのは十四、五歳くらいの女の子だった。その女の子は、屈託ない笑顔で明るく声を出す。

「いらつしゃいませ。何かご依頼ですか？」

「ちよつと会いたい人がいて。ハインっていますか？」

「ハイン？」

女の子は目を丸くする。

「ごめんなさい。ハインだったら、バリプレートに出掛けてましていつ戻るかも分からないんです」

「そうか。いないのか」

「何か伝言はありますか？」

「いえ。いるかなと思っただけですし、出直します」

リユートが立ち去ろうとしたそのときだった。

「待ちなさい」

リユートはその呼び止める声の方を見る。いくつかあるテーブル席の多くは空いており、声の主である女性はすぐに特定できた。

「ハインを指名なんて随分と物騒ね。魔物退治か何かかしら？」

その女性は立ち上がり、リユートの方を向く。鋭い眼光。それとは裏腹に幼さを残す顔立ち。飾り気のない紐で結われた左右の髪も特徴的だ。腰にあるレイピアを見る限り、このギルドの賞金稼ぎなのだろう。

「ははは。そんなこと言うなって。あれでもいい奴なんだぞ」

奥からもう一人立ち上がる。年齢は三十くらいか。おそらくハインと同年代の男だ。都会の紳士といった整った服装をしており、また色眼鏡といった点でもファッションへのこだわりを感じさせる。その右手に持つグラスには、昏過ぎだというのにアルコールが注がれている。

その男が近づいたところで、先ほどの女性が鋭い瞳で睨みつける。

「ミッド・デッド。それ以上は近づかないで。私、アルコールの臭いは嫌いな」

「ええ！？ イーファちゃん、そりゃないよ」

そう叫ぶミッドを無視して、イーファはリユートの方へと歩く。イーファの視線が一瞬リユートの剣に移る。

「見たところ、あなたは魔物退治の依頼者ではないわね。でも、ハインの友人って感じでもなさそう。まあいいわ。忠告だけはしてあげる。ハインにはあまり関わらない方がいいわよ」

それだけ言つて、イーファは建物から出ていった。何も答える時間を与えられなかったリユートは、ただ去りゆくイーファを見つめるだけであった。

その頃、カープは一人で町を歩いていた。

「……はあ。ヤス山脈ねえ。シルクにはあいつがいるんだよなあ」

そう呟いた後、ヤス山脈をちらりと見る。澄み渡った青空を背景に、その山脈には確かな存在感がある。さすがは精霊ナロクの聖域と呼ばれているだけのことはある。しかし、それほどの場所を前に、カープの心は憂鬱で満たされていた。

もう一度溜息をついたとき、カープはその背後に誰かの気配を感じる。カープは、その人物の訪れを知っていたかのように振り返る。

「よ、デイミス。久しぶりだな」

その視線の先は、まるで鏡のようであった。服装は違えど、カープと同じ顔をした青年が立っている。だが、その青年はどこか落ち着いた雰囲気を感じさせる。

「ええ、久しぶりですね。こんなところで会えるとは思いませんで

したよ、兄さん」

そのデイミスと呼ばれた青年は、静かにそう返事した。

## 2 狼村の怪奇譚

ネーゼは椅子に腰掛け、開いた窓から外を見つめている。視線の先には、建物に隠れながらも、広大なヤス山脈が映っている。他に何をすることもなく、ネーゼはただそれをじっと見つめていた。そこへノックの音がする。

「はい」

その返事の後、ハウクが部屋へと入ってきた。その手に持つトレイには、紅茶の入ったお洒落なポットと二つのティーカップが置かれている。

「食堂で貰ってきた。ネーゼシアンもどうだ？」

「ありがとうございます」

ハウクはカップの一つに紅茶を注ぎ、それをネーゼに渡した。ネーゼはそのカップを受け取る。甘い香りがする。ネーゼは紅茶に口を付ける。窓からの風で少し冷えていた身体が温まる。

「身体の方は大丈夫か？」

もう一つのカップに紅茶を注ぎながら、ハウクは問い掛ける。

「はい」

「明日は無理をさせることになるが、少しでも違和感を感じたらすぐに知らせてくれ」

「ありがとうございます。でも、大丈夫です」

ネーゼは笑顔を作る。だが、それに対して、ハウクは首を横に振った。

「そういう油断が一番危険だ。明日はくれぐれも慎重にな」

「はい。そうします」

ネーゼは再び紅茶に口を付ける。その同胞をハウクは静かに見つめる。

「（鏡か。そこまで無理をして追う必要があるものなのか？）」

「まあ一杯やろうよ、リユート君。ちょうど話し相手がいなくて寂しかったんだ。イーファちゃんもあんな感じだったしさ」

リユートの肩を軽く叩きながら、ミッドはグラスに液体を注ぐ。酒臭い男が注ぐその液体は”ただの水”であった。受付の少女アミスが送る”お客さんの前で昼から飲むなんてみっともないです”という視線を意識してのことだろう。

差し出されるグラスをリユートは受け取る。それを見届け、ミッドが口を開く。

「いや、それにしてもハインの知り合いなんて嬉しいね。俺もあいつとは腐れ縁だね」

言葉と同時に漂う酒の臭い。それを手で払いながら、アミスも会話に参加してくる。他に人の姿はなく、暇だったのだろう。

「本当に珍しいですよね」

「いえ、ハインには先日に出会ったばかりなんです」

「え？ そうなの？」

驚いたかのような表情をミッドは見せる。しかし、すぐに何かを閃いたかのような表情に変わる。

「もしかして”魔王”、とか？」

その言葉にリユートは強い反応を示す。それを見たミッドは、脱力したように笑う。

「そういうことね。はは、勘の鋭いイーファちゃんは気づいてたな」「何か知っているのですか？」

「知っているというか、あいつの口癖だからね。少なくとも、このギルドで予想できない奴なんていないよ。で、何か情報でもあるのかな？」

リユートは少し黙り込む。その様子にミッドは首を傾げる。少し間を置いた後、リユートは決意したかのようにミッドを見る。

「はつきりとした情報ではないですが、魔王は現れています」

その言葉に、当然のごとくミッドとアミスは大きく驚きを見せる。

「お、おいおい。それは本当かい？ 何かこう……根拠みたいなものでもあるのかい？」

「いえ。ですが、カミツテでその可能性があると聞きました」

「カミツテ？ あの閉鎖村？ よく入れたねえ」

「ちょっとありまして」

そこまで話したところで、ミッドは少し考え込むような仕草を見せる。その代わりに、アミスが話し掛けてくる。

「でも、言われてみれば、ここ最近は何物の依頼がすごく増えた気がします。特に、”魔物の群れ”に関する依頼が多いです」

それを聞き、リユートはカルテラ付近での出来事を思い出す。五、六匹程度の狼の群れ。やはり、あれは何かの余兆だったというわけか。リユートがそう考えていたところへ、今度はミッドが口を開く。

「そういえば、変な噂も聞いたよな」

「変な噂？」

リユートは眉をひそめ、ミッドの方を見る。

「ああ。もしかすると聞いたことがあるかもな。これはある村の話なんだ。だいたい一、二ヶ月くらい前になるのかな？ 二人の若者が村の依頼で、山から出没する一匹の狼、つまりは”魔物”を退治した」

何か心当たりのありそうな話だ。だが、よくある話でもある。リユートは黙って話を聞く。

「そこまではいい。最近よくある話で珍しくも何ともない。問題はその翌日だ。狼の棲んでいたという山を村人達が訪れたところ、衝撃的な光景を目にしたらしい」

ミッドはそこで一呼吸置いて雰囲気を出す。アミスは少し震えて



おり、耳を塞ぐ準備をしている。聞いてからでは遅いであろうに。

「無数に横たわる狼の死骸。噂では百とも二百とも言われている。ま、数は人によって変わるんだが、俺が聞くところでは百が最低だ。いずれにしても、山中の狼が殺されていて、随分と悲惨な光景だったって話だ」

その話を聞き、リユートは一瞬背筋が凍りつくのを感じる。その脳裏には、先日狼達に囲まれた光景が再び浮かぶ。だが、数は少なくともその二十倍だ。

「狼達には、共通して剣で斬りつけられた傷があった。明らかに人為的。しかも、傷の特徴から、どうも一人の仕業らしい。もしかすると、ただの魔物退治だったのかもしれない。それだけの数の魔物つてのは怖いけどな。だけどな、それより怖いと思うのは、そんなことをできる奴がいるってことだ。そんな奴がいれば、それこそ魔王のような奴だ」

その話を聞きながら、リユートはある一人の人物を思い浮かべる。根拠はなく、まさかとは思う。だが、リユートの頭の中で、その人物の言葉が流れる。

『……魔王も、大体こんなもんだ』

まだ話を続けるミッド。そして、耳を塞いで震えているアミス。その二人を気に留めることなく、リユートの頭はただその人物で支配されていた。

ヤツカテル中心のとある宿。見るからに高級なその宿は、一般の旅行者達には縁がないだろう。

ギルドから出たイーファはその一室に入るところだった。ドアを開けると、その中に一人の男の姿が見える。

「あら、剣の方はもう大丈夫なの？」

「少し傷んでいただけだからな」

そう言った後、声を掛けられた男はソファに座る。そこにイーファが近づく。そのイーファに視線をやり、男が問い掛ける。

「ライゼンは？」

「食べ歩き。もしくは女の子でも見ているんじゃないの？ いい加減にして欲しいものね」

イーファは窓の外を見る。賑やかな町の様子が見える。

「いいさ。これから忙しくなるのだからな」

「相変わらず甘いのね」

イーファは半ば呆れ顔で答える。

「ところで、やっぱり少しではあるけど、バリプレートから人の流れがあったわ」

「さすがに”噂”に留めきれなくなっただか。いくら情報操作しようとも、亡霊までは隠しきれん。むしろ情報操作が裏目に出たな」  
「こうなると、バリプレート側の動きが気になるわね」

その言葉に、男は首を横に振る。

「どうせ大した動きはできん。せいぜい騎士団による亡霊の制圧が限度だろう。」建国の誓い”すら忘れた奴らに何ができる？」

「少なくとも、騎士団のオルト・シーザーとエレヴァ・クレシアは油断できないわ。それに学者長ヤトスも。ある意味、王族より強い力を持っている。それに、内政的に不安定な現状、”魔王”討伐は重要なカードでもある。これは事実よ」

「闇雲に下手な手を打たれると逆に面倒、か」

「ええ。だから、私はバリプレートへ行くべきだと思っわ」

「同感だな」

その男は立ち上がり、そして窓際に立つ。

「いずれにしても歴史は繰り返す。これから始まるのは、”魔王”の時代だ」

そして、その男ミトンは町を眺めた。

### 3 山道の魔物

ヤス山脈 精霊ナロクの聖域

リユートは空を見上げる。頭上近くまで移動していた太陽が眩しい。清々しい晴天ではあるものの、整えられた山道を歩く登山者はリユート達の他にいなかった。しかし、話好きのカープのおかげで寂しさは感じられない。ネーゼの体調も今のところは大丈夫そうだ。

さらに少し歩いたところで、先頭を歩いていたカープが何かを指差しながら振り向く。その方向を見ると、少し開けた場所に休憩小屋がある。前回の休憩から一時間くらいしか経っていない。しかし、ネーゼのことを考えれば、休んでおいた方がいいだろう。

四人は小屋の中に入る。小屋は崖近くに建てられており、中からヤス山脈の自然を一望できた。果ての見えない山々は、まるでこの大自然が無限に続くかのように錯覚させる。

小屋の中央には大きな円卓があり、その上にカープが荷物を置く。

「さあ、そろそろお昼にしない？ いやあ、このピクニック気分いいよねえ。景色はいいし。風も気持ちいいし」

カープは鼻歌交じりにサンドイッチの入った紙箱を開ける。昨日に登山を嫌がっていた人間とは思えない。開き直っているように見えなくもない。

そのカープが張り切ってサンドイッチを手を取った瞬間だった。

低く轟く唸り声。

距離は近い。円卓がわずかに揺れている。

椅子から立ち上がったリユートは、ゆっくりと剣を鞘から抜く。そして、注意しろというハウクの言葉に頷いた後、リユートは気配を殺して小屋から出た。

何もいない いや、木々の間に何か大きな影が見える。リユートは警戒しながら、その影に近づいていく。そのとき、大きな咆哮と共に大地が揺れる。そして、木々を押し倒し、一匹の獣が姿を現した。

その姿はヤス山脈に生息する虎に近い。しかし、その背中には翼があり、何より大きさが違う。この地方に生息する虎の多くは全長二メートル程度だ。しかし、この虎は優に五メートルを超えている。その虎は強い殺気をリユートに向ける。リユートの額から汗が流れる。リユートは小屋から離れるようにゆっくりと後ずさる。

それを見たネーゼが、何を思ったのか小屋から出ようとする。しかし、カープがそれを止める。

「駄目だよ、ネーゼちゃん。リユートの邪魔になる。安心して。いざとなったら俺もいるしね。それより、あれは何だろう？」

「考えても仕方なからう。普通の虎でないことは確かだ」

そう言って、ハウクが小屋から出る。その片手には木製の杖が握られている。

「ネーゼシアンを頼む」

「任せといて」

その返事を聞き、ハウクはゆっくりと虎の背後に回る。そして、息を殺しながら、虎まであと二、三メートルという距離まで近づいた。

突然ハウクは手に持っていた杖で地面を強く叩きつける。それに驚いた虎は、その注意をハウクへと移す。その隙を狙って、リユ-

トが虎に向かつて駆け出した。渾身の力で、虎の首筋へ剣を振り下ろす。しかし、その毛皮はまるで鋼のように硬い。リュートの手に痺れが走る。

そのリュートを虎が手で薙ぎ払う。反応の遅れたリュートは、その力強い一撃で崖の方へと飛ばされる。だが、間一髪のところ、その身体は地面に触れる。

そこへ虎が突進しようとする。しかし、それより先にハウクが杖で虎の尻尾を強打する。虎から巨大な叫び声上がる。それは、大気を震えさせ、さらにはハウクを痺れさせる。

ハウクは一、二歩下がって叫ぶ。

「リュート！ 立てるかっ!?!」

それに応じるかのように、リュートは立ち上がろうとする。しかし、痙攣するその身体は思うように動かない。幸い、虎の注意はハウクに向けられている。

その虎がハウクに向かつて突進する。ハウクはそれを杖で受ける。しかし、その力はあまりに強く、力負けしたハウクは吹き飛ばされる。そこへ虎がのしかかる。骨のきしむ音が聞こえ、ハウクは苦痛に表情を歪める。一方のリュートもまだ立ち上がれていない。

「こりやまずいな」

一連の様子を見ていたカーブが小屋から出ようとする。しかし、その先に行く者がいる。ネーゼだ。ネーゼは一瞬カーブを横目で見ると、そして、すぐに虎へと視線を戻す。そして、両手をしっかりと組み、まるで何かを祈るかのように瞳を閉じた。

その瞬間だった。ハウクに襲い掛かるうとしていた虎の動きが鈍くなる。それを見逃さなかったハウクは、力の弱まった虎の腕から抜け出す。そして、間髪入れずに虎の額へ強い殴打を与える。強い

手応えをハウクは感じた。さらに、立ち上がったリユートが再び虎へと向かい、その背中へと剣を振り下ろす。

吹き飛ぶ血飛沫。それと共に響く大きな叫び声。その後、その虎はよろめきながらどこかへ飛び去っていった。

間一髪の勝利にハウクは深く息を吐く。そして、何かを感じたのか、ネーゼの方を見た。

「今のは……？」

一方で、その様子を遠くから眺める人物がいた。

「へえ、あの子を追い払うなんてね。やるじゃない」

そう言って、その人物はその場を離れた。

### 旅人の憩い地シルク

巨大な虎を追い払ってから数時間ほど歩き、リユート達は中継地点であるシルク村に到着した。既に夕刻を過ぎている。

まず向かったのは、その夜を過ごす宿である。宿といっても、正しく表現すれば少し立派な休憩小屋だ。その簡素な宿を目の前にして、四人は立ち尽くすことになる。

「こりゃ……予想外。いや、いくらなんでもねえ」

そう言うカープの視線の先には、宿の前に陣取る十数人の姿があった。その多くはバリプレートから避難してきた人々であろう。ヤツカテル方面へ向かおうにも、リユート達の遭遇した虎が邪魔をす

る。このため、亡霊騒動と虎の両挟みにあつた人々がシルク村に滞在していたのだ。

「仕方ない。外で休むしかないな」

「ええ〜!? ここまで来て野宿？」

「仕方なかるう」

「でもなあ」

ハウクの提案に対して、カープは恨めしそうな表情で再び宿を見る。そこへ少女のものらしき声が聞こえる。

「お困りかしら？」

四人は咄嗟に声の方を向く。

わずかに焼けた肌に、動きやすそうな服装。額の髪を上げているバンダナは、周囲の民家を彩るカーテンに似た模様をしている。おそらくこの村の住人なのであろう。見るからに活発なその少女は、微笑みながらこちらに近づいてきた。

それに対して、後ずさりする者がいる。カープである。

「ア、アリス」

「久しぶりね、カープ。あと、初めまして。私はアリシア・クレイン。アリスって呼んでね。そっちの方がかわいく聞こえるから」

「でも名前がかわいくてもさ」

「何か？」

微笑んだまま、アリスは半目の視線をカープに向ける。それを見たカープは口籠る。そこへリユートが口を挟む。

「知り合いなのか？」



「まあ、な。知り合いたくて知り合ったんじゃないんだけど」  
「あら、紳士なはずのカープ君？ 乙女にそれはひどいんじゃないかな？」

間髪入れないアリスの言葉に、思わずカープは苦笑いを浮かべる。その様子を見た後、アリスはリユート達の方を向く。

「で、あなた達。宿がないんでしょう？ よかったら、うちに泊まってく？」

「いいのか？」

唐突な親切に、思わずハウクがそう問い返す。

「もちろんよ。」あの子”を大人しくさせてくれたお礼ね」

何のことか理解できず、ハウクは首を傾げる。それに気づき、アリスは笑いながら説明を始めた。

「あはは、ごめんね。あなた達が追い払っていた獣のことよ。ほら、虎みたいな子」

「あれ、お前の差し金だったのかよ!？」

そのカープの突っ込みに、アリスは少しむっとした表情をする。

「失礼ね。そんな意味のないことするわけじゃないじゃない。あの子、本当はこの村を護るのが役割なの。ちなみに、私はミイって呼んでるの。あの子らしくてかわいいでしょ？」

意味なく加わった後半部を無視して、ハウクは尋ねる。

「その”村を護る獣”が急におかしくなったというわけか？」

「……そうよ。そうねえ、ここ三、四日かしら。私も手を焼いてたのよ」

「おいおい、本当に最近だなあ。はあ、四日前だったら安全だったのか。ここんところ、ついてないなあ」

「あはは。日頃の行いね」

肩を落とすカープを笑いながら、アリスは道を先導する。その後にリユート達は続く。それを見たカープは少し悩む素振りを見せる。しかし、すぐに諦めたかのように、その後について行った。

#### 4 欠けた月夜 シルク

現在十八歳のアリスは、両親と離れて一人で暮らしていた。

十五歳の頃に独り立ちを決め、そのままこのシルク村に住み着いたらしい。本当は都会に住むつもりだったが、この広大な自然について惹かれてしまったとのことだ。

ちなみに、カープと出会ったのもその頃らしい。

そのアリスの家は、一人暮らしにしては広く、四人を加えても十分に寝泊りできるものであった。たまに遊びに来るアリスの両親への配慮らしい。

綺麗に片付けられた木製の部屋からは、ほのかに香水の香りが漂う。疲れを癒すマカラナの花から作ったもの、とアリスは言った。

「あ、お腹空いてるでしょ？ ちょっと待っててね」

アリスは果物とパンを持ってくる。一緒に持ってきたガラス瓶には、マカラナの花を煎じて作られたお茶が入っている。

「さ、遠慮せずに食べて」

勧められるままにリユート達は食事を取る。世間話を交えた食事の後、リユート達はすぐに休むことにした。昼間の戦いに疲れたのか、リユートとハウクは横になるなり、すぐに眠りについた。

眠りにつかなかったカープは一人で外に出ていた。さすがに娯楽施設といったものは見当たらない。カープは村外れにある崖に座り、空を眺めることにした。そこから見える月は、少しだけ欠けていた。

しばらくして、そのカープの背後から声が聞こえる。

「こんなところにいたんだ。ふふ、その何かを考えてるって感じ、全然似合わない」

「放つとけ」

そう言い返しながら、カープは振り向く。そこには、笑いながら近づくアリスの姿が見える。アリスはカープの隣まで来て立ち止まる。

「で、例の件を考えてるの？」

「だから会いたくなかったんだよなあ」

明らかに憂鬱な態度を見せながら、カープは再び前を向く。アリスはその言葉を流したまま、カープの背中を見つめている。

「悪い。そっちはまだ考えたくないんだ」

「うん。そんなとこだと思った」

軽くそう返事した後、アリスは笑いながら空を見上げる。一方のカープは、やや拍子抜けといった表情をする。

「でも、デイミスに聞いたよ。鏡の浄化を続けてるって。聞けば、今回もそうじゃない」

空を見上げたまま、アリスはそう言う。

「痛いところを突くよなあ。というか、あいつここに来たのかよ」「うん。」お兄さん」と違って律儀なのよね

カープは何も言い返さない。

「まあ、今のは冗談として、デイミスは心配してたよ」

「知ってるよ。昨日会ったばかりだし」

「そうなの？ 一緒に来なかつたんだ」

「あいつはあつちで探し物。鏡は俺に任せるってさ」

ふーん、といった表情をアリスはする。

「はあ、そろそろ勘弁してくれよ」

「そうね。あの件については一応確認してみたけど、今はまだ無理ってことにしておいてあげる」

そう笑いながら、アリスはちらりとカープを見る。しかし、憂鬱そうなその様子を確認した後、すぐに再び空を見上げた。その視線の先には、欠けた月が映っている。

「綺麗な月ね。あゝあ、”月の丘”へ行きたくなったなあ」

「は？」

その唐突な、明らかに無理のある話題転換に、カープの思考は一瞬追いつかなかつた。反射的にアリスの方を向く。そのカープを気にすることなく、アリスは話を続ける。

「ロークの月の丘よ。この世で一番月が綺麗に見えるって言われている場所。あ、方角はバリプレートと一緒にだ。奇遇よね」

微笑みながら、アリスはカープの方を向く。そのアリスを見て、カープは顔をしかめる。得意げな笑みを浮かべるアリスが次に出す言葉は、カープでなくとも容易に想像できるだろう。

「一緒に行ってもいいよね？ もちろん鏡の方も手伝うよ」

「……そんな言い訳はいいって。お前、ただ着いて来ただけだろ？」

「そこら辺はご想像にお任せってとこね」

カープは肩を落とす。欠けた月は、これから新月へ向かおうとしている。そこから次の満月になるまでは、まだしばらく時間が掛かる。それに対して、“月の丘”はシルクからそれほど遠くない場所にある。想像するまでもなく、明らかに“月の丘”はアリスの目的ではない。

カープは溜息を吐く。“目的”を持っている以上、アリスに何を言っても無駄だ。そう悟ったカープは立ち上がる。

「明日断られることを女神様に祈るよ。じゃ、おやすみ」

カープはアリスの家へと歩いていく。その背中を見つめ、アリスは小さく首を横に振る。

「迷うのは分かるんだけどね。でも、時間は有限。先延ばしは、やっぱり先延ばし。それに気づいてないはずはないんだけどね」

アリスは再び月を見る。

「本当に綺麗な月。まるで女神伝説の始まりみたい」

時を同じくして、その月をもう一人の少女も見つめていた。月の光はやや弱く、その少女ネーゼを寂しく照らした。

「……月。あの頃と同じ。ずっと変わっていない」

ネーゼは月から視線を外す。そして、部屋の中を見る。アリスの寝室には、ネーゼの他に誰もいない。

「（でも、もう私は一人だけ……）」

瞳を閉じたネーゼは、ある風景に包まれた。そして、そこに立つネーゼの横を二人の子供が駆け抜ける。

『ネーゼちゃん、こつちだよ』

『ネーゼ姉さん、遅いぞ』

そう言いながら、その二人の子供はネーゼを見て笑う。

懐かしい顔。懐かしい風景。その幸せが消えてしまうことなんて、ネーゼは想像していなかった。想像できるはずがなかった。

『目が覚めたときには全て終わっている』

その言葉が強くネーゼの頭の中に響く。

「私は……嫌です」

不意にネーゼの口から言葉が漏れる。しかし、それに返事する者はいない。静寂を破ったその音は、さらなる静寂を呼んだ。

ネーゼはうつすらと目を開く。涙を流しているわけではない。何かを考えているわけでもない。ネーゼはただ呆然と寂しい部屋の中

を見つめていた。

そして、シルクの夜は過ぎる。

### 千年遺跡

その一方、千年遺跡の夜は穏やかではなかった。

「こんなことが……」

「信じられない。まるで悪夢だ」

そこには二人の騎士の姿があつた。彼らは千年遺跡の調査のため、バリプレートから派遣されていた。簡単な下調べ、少なくとも彼らはそう考えていた。町で流行っていた”噂”など信じてはいなかった。しかし、その視線の先に広がる光景を前に、二人はその考えを改めた。

建物内を徘徊する無数の死者達。強い異臭が漂い、何より低いその呻き声が不気味だ。

二人の騎士は心の中で叫ぶ。夢なら覚めて欲しい、と。

「軽い調査のつもりが……これだと、生きて帰れるかすら分からない」

「ああ。事は重大だ。急いでオルト団長に報告を　　うわあ！」

突然目の前に現れた亡霊が騎士の一人を強く殴る。

騎士の悲鳴は遺跡中に響き渡った。

そこはこの世の地獄。生者を許さぬ死者の聖域。

その地獄の奥底。鏡は静かに、ただ静かに眠っていた。



## 5 欠けた月夜 バリプレート

### 首都バリプレート

その男は一人で夜空を眺めていた。やや欠けた月。これから幾日も経てば、闇の新月が訪れる。

「こちらにいらっしやいましたか」

「風が気持ちよかったのだな」

男に声を掛けたのは、甲冑に身を包んだ若い騎士だ。恭しく礼をした後、その騎士は話を続ける。

「エレヴァ副団長がお捜しでした。遺跡の件で、お話があると」

「エレヴァが、か。分かった。場所は？」

「第七会議室です」

「ありがと。すぐに向かう」

「はい」

男は再び夜空を見る。

欠けた月の周りには、幾千もの星が浮かんでいる。強い光もあれば、弱い光もある。その男には、まるでこの世の命のように映った。

「あの……」

先ほどの騎士が言葉を挟む。男は再びその騎士の方を向く。

「ああ、悪かった」

歩き出したその男の名は、オルト・シーザー。バリプレート聖騎士団を統括する騎士団長であり、歴代最強と謳われる騎士である。

「いらつしゃいましたか」

ノックの音に気づき、部屋の中にいた若い女性が立ち上がる。エレヴァ・クレシアである。オルトが部屋に入ると、エレヴァは深く礼をして、オルトが席に着くの待つ。

部屋の中にはオルトとエレヴァの二人しかいない。オルトは席に着き、長机の上に並べられた資料を眺める。そこには、千年遺跡という文字が見える。また、壁に掛けられた白板には、遺跡内部の地図らしきものが描かれている。

「何か進捗でもあったのか？」

「はい。先刻ヴィルが調査から戻りました」

席に着いたエレヴァの返事を聞き、オルトの眉が若干動く。

「エルドも一緒ではなかったか？」

「……殉職です」

エレヴァは少し視線を落としながら答えた。オルトはそれ以上を尋ねない。エレヴァはすぐに視線を戻し、そして話を続ける。

「ヴィルからの報告によれば、遺跡内部では多くの死者が徘徊しているとのこと。にわかには信じられない話ではありますが」

「“亡霊”というのは、正しかったということか」

その言葉にエレヴァは静かに頷く。それを見た後、オルトは再び

口を開く。

「調査決定の遅延が悪い方向へ進まなければいいが。ところで、カ  
ープ殿はまだ戻っていないのか？」

「はい。到着にはまだ時間が掛かりそうです。ヤツカテルから飛ば  
された伝書鳩によれば、現在ヤス山脈を超えているとのことですよ」

「ヤス山脈を？」

「報告では、どうも線路が土砂で塞がれているようです。緊急のた  
め、ヤス山脈以降については、既に迎えを手配しています」

その言葉を聞いて、オルトは溜息まじりに小さく首を振る。

「悪い偶然は重なるものだな。これでまた少し対応が遅れる」

「ですが、オルト団長。今回の調査結果でご承認いただけると思  
います。私は千年遺跡へ向かいます」

エレヴァは、言葉と同時に強い瞳でオルトを見る。何があっても  
同意を得たい。その強い気持ちがオルトに伝わる。

「どこから漏れたのかは知らんが、お前の件は随分と噂になってい  
るぞ、エレヴァ。代理とはいえ、副団長としての立場を忘れるな。  
副団長が動くとなれば、民衆に多大な不安を与えてしまう」

「十分に理解はしているつもりです。ですが、これは必要なこと  
です」

エレヴァの強い視線は、まだオルトに向けられたままだ。しかし、  
オルトは首を横に振る。

「私情も含まれているのではないか？」

「否定はしません」

エレヴァは迷うことなく答える。そして、立ち上がり、深々と頭を下げる。

「あの場所は、私にとって特別な場所です」

会議の後、エレヴァは一人で鍛錬場にいた。鍛錬用に備えられた槍を手にし、基本の型を入念に確認する。

その背後で、足音がすることにエレヴァは気づく。

「……ヤヤトス殿ですか？」

「はい。まだ明かりが消えていないようでしたので、少し覗きに参りました。やはりエレヴァ殿でしたか」

ヤヤトスと呼ばれた男は、微笑みながらそう返事をする。少し白髪混じりのその男は、もう五十は超えているだろう。眼鏡の下にあるその表情は温和であり、その物腰も落ち着いている。その華奢な身体はバリプレートバリプレートの学者の正装であるローブローブに包まれ、その左胸辺りには勲章がある。それには本の絵が刻まれていた。

その勲章が示す意味は、ヤヤトス（学問の極み）。その学術的な功績により、バリプレートバリプレートから”称名”と呼ばれる名前を与えられた証である。

バリプレートバリプレートが誇る王立研究所の学者長マト・ヤヤトス・ヴェルトールマト・ヤヤトス・ヴェルトール。騎士団長オルト・シーザーと対をなす存在である。

「それで、望む結果は得られましたかな？」

「……前向きにご検討いただける、とはいただきました」

エレヴァは鍛錬の手を止め、マトの質問に答える。礼儀正しい態

度に反して、その声からは納得いかないという気持ちを読み取れる。マトは小さく笑う。

「あの男らしいですな。月並みですが、エレヴァ殿のことが心配なのでしよう。これまで娘同然に育ててきたのですから。あの男が持つ唯一の私情です」

「もちろんオルト団長には感謝しています。ですが、この件に関してだけは、引き下がるわけにいきません」

「まだ十年前の事件を忘れられませんかな？」

「……」

エレヴァは言葉を返さない。黙ったまま瞳を閉じ、そして少し俯く。その様子をマトはじっと見つめる。

「これは失言でしたな。申し訳ございません」

「いえ、ヤヤトス殿に落ち度はありません。いつまでも忘れられない私の責任です」

そう言いながら、エレヴァは再びその目を開いた。マトはエレヴァを見つめたままである。

「あなたの父上殿と姉上殿は、揃って優秀な学者でした。私にとっても非常に遺憾な事件となります。ですが、それ以上に、エレヴァ殿がそれに縛られることを悲しく思っています。オルト殿も同じ気持ちなのでしよう」

「……お気遣いに感謝いたします」

その形式的な返事を聞き、マトは小さく溜息を吐く。

そのとき、遠くから女の子のものと思える声が聞こえる。

「マト〜！ どこにいるの〜！？ ねえ、マト〜！」

「おや、声が聞こえますね」

「この声はレーテア姫ですね」

エレヴァの言葉の後、マトは小さく笑いを漏らしながら頷く。

「それでは、私はここで失礼いたします。いやはや、お姫様のお相手というのも大変なものです」

「その割には楽しそうに見えますよ」

「何、孫みたいなものですから」

そう言って、マトは一礼をする。それに応じて、エレヴァも一礼を返す。エレヴァがその頭を上げたとき、エレヴァとマトの視線が合う。

「エレヴァ殿、あなたも同じですよ。私やオルト殿だけではありません。ここにいる誰もがあなたのことを家族のように思っています」

「……………ありがとうございます」

その返事にも形式的なものを感じたのか、マトはやれやれといった表情を見せる。そして、ゆっくりと鍛錬場から離れていった。

その場に残ったエレヴァは、再び強く槍を握った。

『それじゃ、行ってくるね。帰ったら、すぐにお誕生会よ』

『エレヴァ。お母さんに迷惑をかけず、いい子にしているんだよ』

『うん！』

槍を突き出す度に、その”光景”がエレヴァの頭の中を流れる。そして、槍を握るその力は次第に強くなっていった。

そして、バリプーンの夜は過ぎる。

## 悪夢 レイラ

『心配いらないよ。みんないい子ばかりだからね』

その少し大柄な男は、その風貌に似つかわしい優しい優しい声で、幼い少年に声を掛けた。笑顔も絶やしていない。

しかし、その少年は何も答えなかった。黙ったまま、俯いたまま、その男について行った。その先には一軒の大きな建物が見える。

『今日から家族になるリユートだ。みんな仲良くするんだよ』

リユートは何も言わず、ただ俯いたままだった。

そのリユートに一人の少女が近づく。八歳のリユートにとって、その十三歳の少女は、明らかに”お姉さん”であった。

『初めまして、リユート。私はレイラよ。よろしくね』

リユートは口を開かない。しかし、レイラは気にすることなくリユートの手をとった。

『黙ってないで。ほら、向こうでみんなと一緒に遊びましょ。みんなリユートの家族なんだよ』

その瞬間、リユートはレイラの手を振り解く。

『どうせみんないなくなるんだ!』

その言葉を残し、リユートは建物の外へと駆け出した。



## 1 本と槍と王冠

ヤス山脈 精霊ナロクの聖域

「道はそんなに険しくないけど、十分に注意してね。たまに蛇とか出るから」

その活発な声を出すのは、先頭を身軽に進む少女である。

(アリシア・クレイン)

シルク村で出会ったその少女は、リユート達と一緒にバリプレートへと向かっていた。千年遺跡にも同行するつもりらしく、その背中には”護身用”として滑車付きの小型弓がある。

その物騒な背中を憂鬱な表情で見るのはカープである。できれば、このアリスの同行を阻止したいと考えていた。しかし、そのための自然な理由を思い付くことができず、さらにリユート達はあっさり、とアリスの同行を受け入れた。これにより、半ば流されるかのように、カープもアリスに同意することとなった。アリスの勝ち誇った表情は、まだカープの目の前に焼き付いている。

そのカープは、しばらくの間、後方で大人しくしていた。しかし、開き直ったのか、山道の半ばに差し掛かる頃には、元の調子へと戻っていた。

日は沈みかけ、山道は薄暗い朱で染められた。これ以上の時間を掛けると、足場の確認すら難しくなる。そう思い始めたところで、ようやくリユート達はヤス山脈の麓へと到着した。

「ようやく終わりかな？ 長かった」

麓に到着したことを確認し、カープはつい声を漏らす。

「あと少し歩けば人里に着くよ。私の知り合いもいるし、そこへ行きましよう」

「少してどれくらい？」

「そうね。一時間くらいかしら」

軽い口調で返すアリスに対して、カープはがっくりと肩を落とす。その一方で、リユートはネーゼの様子を確認する。道中でも何度か様子を確認したが、これまでのところ問題はなさそうだ。リユートと目の合ったハウクも同じ見解なのだろう。リユートの目を見たまま静かに頷いた。しかし、暗くなる夜道をさらに一時間も歩くことになる。その点では不安が残る。

そのとき、近くで物音が聞こえる。続けて足音が聞こえ、それはリユート達へと近づく。

「カープ殿ですね？」

足音が止まったと同時に、力強い声が聞こえた。その声を出したのは、白銀の鎧を身に付けた男であった。鎧は上半身のみと軽装であり、その胸部中央には”本と槍と王冠”を組み合わせた紋章が刻まれている。この地方ビルナードであれば、子供ですらその紋章の意味は知っている。バリプレート王家の紋章。そして、それを鎧に許された男の正体もまた問うまでもない。バリプレート聖騎士団の騎士である。

その騎士は礼儀正しく名乗った後、深々とその頭を下げる。そして、カープを迎えに来たと付け加えた。その一方で、当のカープは戸惑いを見せる。

「む、迎えて。そんな話は聞いてませんよ？」

「はい。私も昨夜に連絡を受けました。緊急事態と聞いております」  
寄り道への後ろめたさがあったのか、カープは胸を撫でおろす。  
しかし、遅れて認識した”緊急事態”という単語に、慌てて騎士の方を見る。

「あの、何かありましたか？」

「私も詳細までは知らされておりません。ひとまず、ここを移動しましょう。近くに馬車を用意してあります。お連れの皆様も一緒にどうぞ」

リユート達は案内されるままに馬車へと乗り込む。

その三十分後には、駅町ハルデイに到着した。ハルデイもヤツカテルと同じく土砂の影響を受けており、バリプレート方面行きの列車ですら運行停止中であつた。

しかし、騎士はその事態を気にすることなく、ある列車へとリユート達を案内した。豪華な装飾と”本と槍と王冠”の紋章を持つ王室専用列車。それに乗り込み、リユート達はバリプレートへと向かった。

しばらくして、その線路を呑み込む巨大な都市の姿が見えた。

### 首都バリプレート

見渡す限りの広大な建物にリユート達は包み込まれていた。駅に備えられた時計台によると、時刻は二十時を過ぎたところである。それにも関わらず、その都市は明かりに満ち溢れていた。

街路に溢れる人の数は、先日の商業都市ビルナよりもさらに多い。油断すると、その雑踏に呑み込まれてしまいそうである。まるで亡霊騒動が嘘であるかのようだ。

「すごい数の人。けっこう出ていったのかなと思ってた」

そう言いながら、アリスは道行く人々を見渡す。その人々の表情に、暗さといったものは感じられない。

「亡霊の件でしたら、私も報告程度には受けております。最近の話題ですし、それに我々騎士団がおります。まだ多くの方々は安心されています。もちろん我々はその期待に応えねばなりません。さあ、王城へ案内いたしましょう」

騎士に先導され、五人は王城へと進む。本、槍、王冠。異なる紋章を持つ連なった三つの城門をくぐり抜け、城内へと入った。

「お待ちしていた。カープ殿、そして有志の方々よ」

来客用の一室でリユート達を出迎えたのは、騎士団長オルト・シーザーだ。

四十半ばであろうその騎士は、全身を包む甲冑の上からでも分かる屈強な肉体を持っている。さらに、オルトの放つ鋭い空気がその場を支配する。百戦錬磨の戦士というのは、このような人物のことを指すのであろう。

リユート達が立派なソファに腰掛けたところで、オルトが再び口を開く。

「既に説明を受けているかもしれないが、私の方から改めて説明さ

せていただく。現在の遺跡はかなり危険な状況となっている。これまではカープ殿に鏡の浄化まで依頼していたが、今回それは我々騎士団で担当することにした」

えっ、とカープは驚きを見せる。

「そこを今回もこちら……ってわけにはいかないですかね？」

オルトは一瞬怪訝な表情を見せる。

「今回はこれまでと大きく状況が異なる。ご理解いただきたい」

オルトの話は納得できる。そのためか、複雑といった表情でカープは黙り込む。そして、申し訳なさそうな視線で、ちらりとネーゼを見る。

「ちょうど今夜、亡霊制圧のために先遣部隊を向かわせる予定となっている。その部隊に水を持たせよう」

オルトはテーブルの上に置かれていた小瓶へと手を伸ばす。その中には、女神の泉から汲んだ水が入っている。その小瓶にオルトの手が触れたときだった。

「私は……鏡の場所へ行きたいです」

ネーゼの金色の視線が、強くオルトに向けられる。しかし、それでもオルトが動じることはない。小瓶から一度手を離し、そして冷静に口を開いた。

「カミツテの少女よ。どうして鏡を望むのだ？」

「それは」

そこへハウクが割り込む。

「カミツテの民としても、鏡の状況を確認したいと考えている。現状が異常なのは明白だ。だから、無理を承知でお願いしたい」

オルトはハウクの顔を見る。ネーゼと同じ、強い金色の視線がそこにはある。

「カミツテの主張は理解できなくもない。だが、あの管轄は我々バリプレートにある」

「魔王」が関われば、そうも言っていられないはずだ」

その言葉にオルトは少し考え込む。そして、小さく息を吐いてから再び口を開く。

「承知した。カミツテの意志を尊重しよう。だが、数日だけ待つていただきたい。我々としても、危険と分かっている場所に貴公らへ向かわせるわけにはいかない。先遣部隊の報告を待った後に出発していただく。その水の運搬も貴公らにお願いしよう」

そう言った後、オルトは立ち上がる。

「私はここで失礼する。後の案内は使用人が行うため、もうしばらくここでお待ちいただきたい」

静かに礼をした後、オルトはその部屋を出ていった。

部屋を出た後、オルトは一人で廊下を歩いていた。その視界に一人の騎士が映る。その騎士はオルトに向かって深々と礼をする。

「オルト団長、この度のご決定に感謝いたします」

「現実に亡霊が現れたのだ。王もすぐに許可を出された。だが、まだ民衆に知られるわけにいかない。総勢十三名。亡霊相手には少ないかもしれない。移動も列車ではなく馬車となる。無理だけはするな」

「はい」

その返事を聞いた後、オルトは右手を甲冑に刻まれた紋章へと当てる。そして、強く一言だけ言った。

「成功を祈る、エレヴァ」

## 2 遠く見える魔城

「……」

ベッド脇の窓から光が差し込む。リュートはその窓を開ける。冷たい風が部屋に入ってきた。その先に見えるのは大きな庭園だ。朝早いためか、外を歩く人は見当たらなかった。

「……」

リュートは窓を閉め、そしてベッドから降りた。

着替えを済ませ、リュートは部屋の外に出る。何人かの使用人が掃除を行なっている。リュートはそのまま廊下を進む。

「おはよ！」

不意に声を掛けられ、リュートは振り向く。そこに立っていたのはアリスである。

「おはよう」

挨拶を返すリュートに、アリスは微笑みながら近づく。

「随分と早いよね。まだ六時前よ。といっても、今日は千年遺跡だもんね。もしかして緊張して眠れなかった？」

「いや、逆に寝るのが早くて、寝過ぎたくらいだよ。そういうアリスも早いね」



「ん？ 私はいつもこんな時間だよ。朝って好きなんだ。この清々しい空気。まだ何にも汚されてないっていうか、そんな感じがいいの」

「確かにそうかもしれない」

「そういえば、さつき使用人さんに、この城の塔の入り方を教えてもらったの。ほら、西側に見えたあのすごく高い塔。このバリプレートを一望できるんだって。千年遺跡も見えるらしいよ。ちょっと行ってみない？」

特にやることもなかったリユートは、アリスと一緒にその塔へと向かった。

塔の最上階へはエレベータで上る。柵で囲まれただけのエレベータからは、外の景色を眺めることができた。見上げることしかできなかった建物が、見下ろさなければならぬ位置へ移動していく。少し不思議な気分であった。

大きな音と共に、アリスの声が聞こえる。

「着いたみたいね」

アリスとリユートはエレベータから降りる。

エレベータからも見ることはできたが、屋上から眺めるその光景はさらに圧巻であった。都市の中央に位置する大きな公園。そこから外まで続く大通り。時計台のある駅。バリプレートが誇る王立研究所。

ふと、リユートは備え付けの双眼鏡に気づく。その中を覗いてみると、小さくではあるが、建物らしきものが見えた。

気になったのか、アリスもリユートと交代で覗き込む。

「たぶん、あれが千年遺跡ね。かつて魔王アティラスが棲んでいた

とされる魔城。そして、鏡の眠る場所。意外と近いのよね。亡霊騒ぎが起きるのも分かる気がする」

「千年遺跡、か」

昨日の昼頃に、千年遺跡へ向かった先遣部隊から報告が届いた。

その出発から三日後のことであった。報告によれば、エレヴァ・クレシアを筆頭に、亡霊の退治は順調に進んでいるらしい。亡霊への対処法も見つかっており、胴と頭が離れれば亡霊はその活動を止めることであった。

これらの情報により、亡霊に対する危険性は低くなったと判断された。その結果、リユート達に千年遺跡へ向かう許可が与えられた。もちろん護衛の騎士が同行する。さらに、リユート達の出発と同時に、民間に対して亡霊討伐が正式に発表されることになっている。

その出発は本日の昼となる。

「……」

「どうしたの？ ちょっと緊張しちゃった？」

「そうかもしれない」

「あはは、そんなんじゃないが思いやられるよ。と言っても、私も少し緊張しているんだけどね」

「嘘付け！」

突然二人の背後から声が聞こえる。驚いて二人が振り返ると、そこにはカープが寝転がっていた。

「お前に緊張なんかあるかよ」

「カープ？」

「あんた、いつからそこに？」

その質問に対して、カープはあくびをしながら答える。

「最初からに決まってるだろ？ エレベータの音なんて消せるわけないし。まあ、少しうとうととしてただけだ」

「うとうとって……」

「だって、気持ちよかつたんだしさ。これから地獄へ行くんだから、それくらいはいいだろ？」

そう言ってカーブは起き上がる。そして、千年遺跡の方を向く。肉眼ではその建物をはっきりと確認できない。

「鏡の浄化のために何度か行ってたけど、まさか亡霊の巣窟だったとは思わなかったよ。本当にぞつとするよ」

「そもそも亡霊なんて本当に存在したのね」

「だよなあ。俺もそこはまだ信じらんないよ。……信じたくない」

リユートも亡霊の存在には半信半疑である。しかし、その反面で期待に近い感情も抱いていた。これまでの魔物とは違う”何か”が、”魔王”アティラスの遺跡に存在している。

「リユート。ネーゼちゃんをしつかり護ってやれよ。俺もできる限り手伝うから」

「あ、私も手伝うからね！」

「……お前、普通の”女の子”ってのは亡霊を怖がるもんだろ？」

そんな二人を見た後、リユートは千年遺跡の方角を向いた。

ネーゼはベッドで横になっていた。眠っているわけではない。昨夜から一睡もできていない。朝日に気づきながらも、ネーゼは焦点の定まらない目で天井を見つめていた。

『ネーゼ』

ふと、ネーゼの耳に誰かの声が聞こえた。もちろん、そこには誰もいない。しかし、その声はネーゼの頭に響いていた。

「鏡……」

ネーゼはベッドから起き上がった。

その姿を見つけたのはハウクだった。ネーゼは何かに憑かれたかのように歩いている。その足元はおぼつかない。また、その顔は色を失っていた。

「ネーゼシアン？」

その声はネーゼに届いていない。ハウクはネーゼの肩に手を掛け、さらに強く声を掛ける。

「ネーゼシアン！」

「……っ！」

ネーゼは一瞬はつとした後、ハウクの方を見る。

「どうしたのだ？」

「……いえ、鏡の場所へ……」

「一人でか？」  
「……」

ネーゼはそのまま黙り込んでしまう。その無意識の行動をネーゼ自身も理解できずにいた。

「ちょうどいい。私も朝の散歩をしていたところだ。ネーゼシアンも一緒に付き合わないか？」  
「……はい」

小さな返事の後、ネーゼはハウクの後ろに続く。そのネーゼを振り返り、ハウクが話し掛ける。

「ネーゼシアンはカミツテの外で暮らしていたのだったな」  
「……はい」

まだネーゼの返事は小さい。だが、ハウクは気にすることなく話を続けた。

「私はカミツテから出たことがなかったからな。外の世界のことなど、話でしか聞いたことがなかった。実際にこの目で見ると、やはり印象が違うものだな」

「私も同じです。家の中にいることが多かったですから」  
「それでは私と同じということだな。外の世界とは面白いものだな」  
「はい」

「それにしてもずっと家の中か。随分と大事にされてきたのだな」  
「……」

ネーゼは何も答えずに俯く。その表情は少し曇っている。

「……どうやら聞いてはならないことだったか。失礼した。今の質問は忘れてくれ」

ネーゼは俯いたままである。それを見て、ハウクが口を開く。

「ネーゼシアン、何か悩みでも抱えているのではないか？ 我々でよければ相談に乗るぞ？ 特に、リユートはネーゼシアンのことを心配している」

「……はい」

ネーゼは俯いたまま返事する。少し悲しげに見える。

「いや、強要するつもりはない。それを決めるのはネーゼシアンだ。さて、そろそろ戻ろうか」

「……はい」

ネーゼの返事は最後まで小さなままだった。

## 千年遺跡

遺跡内のある一室に、一人の騎士が向かっている。

「エレヴァ副団長、本日昼過ぎには”水”が届くとのことですよ。報告ありがとうございます。ここまで少し時間が掛かりましたか。これまでの被害はどうなっていますか？」

「初日の重傷者二名を除けば、目立った被害はありません。退治方法さえ分かっただけです。知能がない分だけ簡単な相手です」

「ありがとうございます。ですが、まだ終わったわけではありません。気を引き締めていきましょう」

エレヴァの言葉に頷き、その騎士は戦場へと戻っていった。エレヴァはその背中を静かに見守る。

そのとき、エレヴァの背後の壁が崩れる。そして、数体の亡霊がエレヴァに襲い掛かった。しかし、エレヴァは驚く素振りもなく、ただ静かに瞳を閉じた。

鋭い風の音が響く。

それと同時に、亡霊達の首がその床に転がった。

「これ以上、この場所を穢させるわけにはいきません」

### 3 亡霊の巢窟

その古城が目の前に飛び込んでくる。

魔王アティラスの魔城とされる千年遺跡。それはバリプレートからの直通列車を降りたところで姿を現した。さすがにバリプレート城ほどの大きさはない。それでも、歴史の重みがあるためか、石で造られたその建物は大きな存在に映った。

「……………」

その古城をネーゼはじつと見つめている。逃げる最後のチャンスとふざけるカープの声など、ネーゼの耳には入っていない。代わりに聞こえているのは、響く心臓の音のみである。そして、感じているのは、震える身体と息苦しい想いである。

「……………ゼ」

その静寂を破る声が聞こえる。ネーゼはふと我に返る。そこにはリユートの姿が見える。

「ネーゼ、大丈夫か？」

「あ……………はい」

そう返事をして、ネーゼは再び千年遺跡を見る。

「間違いありません。ここに鏡があります」

その言葉を聞き、リユートも千年遺跡を見る。カルテラから始まった短い旅の目的地がその目の前にある。まだ終わつたわけではな



いが、リユートは少し寂しさようなものを感じる。そのためか、自然にリユートの口から言葉が零れる。

「ネーゼ、必ず護ってみせる」

少しの間が空く。そして、ネーゼは呟くような小さな声で言った。

「ありがとうございます」

## 千年遺跡

バリプレートから同行している二名の騎士に先導され、リユート達は遺跡の中へと入る。薄暗い広間には数名の騎士の姿が見える。

騎士達は重々しい雰囲気で一瞬リユート達の方を見た後、すぐに自身の持ち場へと集中した。

その重々しい空気の原因は、部屋の中を見ればすぐに理解できる。床に散らばる多くの屍。肉の付いていないものが多い。また、人型でない屍も見える。そして、それら全ての首と胴は切り離されていた。

おそらくこれが亡霊である。これらの屍が動き回っていた。頭の中に広がるその光景と、その場に漂う異臭が相まって、リユートは吐き気を覚える。

「さあ、鏡はこの先です」

そう先導する騎士達に続いて、リユート達は奥へと進んだ。

鏡はこの建物の地下にあるらしい。地下へと続く階段の手前で、副団長エレヴァ・クレシアと合流する予定となっている。

リユート達は建物の外回りの廊下を歩く。その廊下は人が三、四人は並べるであろう広さだった。一方の壁には窓から取り付けられており、そこから幻想的な光が差し込んでいる。その光が廊下の床に散らばえる屍達を照らしていた。

どこを見渡しても屍が見える。静かに横たわるそれらは、あまりに不気味な存在であった。しかし、先発した騎士達の活躍のためか、幸いなことにまだ亡霊には遭遇していない。リユートは少し緊張を解き、小さく息を吐く。

そのときだった。

不意にリユート達の背後から壁の崩れる音がする。全員がその方向に集中する。周囲に強い緊張が走る。

その緊張に応えたのか、崩れた壁からは数体の骸骨が姿を現した。

「お、おおい。う、動いてる……動いてるって、あれ」

その光景に驚いたのだろう。カープの言葉は強く吃っていた。一方で、誰一人として言葉を返せない。それほどの恐怖が目の前にあった。

しかし、歴戦の騎士達は、すぐにその恐怖を打ち破る。事態を認識するや否や、すぐに骸骨達へと駆け寄り、そして手に持っていた槍で果敢に立ち向かう。まるで悪夢でも見ているかのような戦いだ。少しして、骸骨達の胸から頭が落とされる。それと同時に骸骨達は床へと崩れ落ちた。

「終わった……のか？」

その場を動けなかったリユートは、崩れる骸骨を遠目で見る。

！

今度はリユートの背後から大きな音がする。

崩れた壁の奥から現れたのは一体の骸骨。その骸骨は、振り上げた手をリユートに向けて叩き付ける。咄嗟の判断でリユートはそれをかわす。体勢をわずかに崩しながらも、その危機本能により、無意識のうちに背中中の剣を抜いた。

一方の骸骨も、既に次の攻撃へと移ろうとしている。そして、再びその手をリユートに向けて振り下ろした。リユートはその一撃を剣で受け止める。そのすぐ目の前には骸骨の顔がある。

異臭が強い。

吐き気がする。

目が痛む。

それらは、視界の恐怖と共に襲い掛かる。しかし、リユートはそれらを押し殺し、何とか骸骨の攻撃をさばく。だが、骸骨の反応は早く、すぐに次の攻撃を仕掛けようとする。

そのとき、突然その骸骨がその体勢を崩す。その足には矢が突き刺さっている。

「今よ！」

アリスの声と同時に、カープが一瞬の風となって駆け抜ける。そして、手に持っていた剣で骸骨の首に強い一撃を与えた。

骸骨の頭が胴体から離れる。さらに、カープは素早い剣さばきで骸骨の胴体からその四肢を切断する。

小さくなる不気味な呻き声と共に、骸骨は崩れ落ちた。少しして、

その呻き声もなくなった。

しかし、カープはまだ緊張を保ったまま、床の骸骨を見る。

「これ、復活したりしないよね？ どうやって倒したって判断すればいいんだろ……ああ、動き出しそう」

「頭と胴が離れば、その活動を止めると聞いております」

駆け付けた騎士の一人がそう答える。半信半疑のカープは、まだ骸骨を見ている。しかし、四肢が離れており、それ以上の活動はどうか考えても不可能だ。そこまで考えたところで、ようやくカープは骸骨から目を離れた。ただし、剣はその手に握られたままである。一方のリユートも同じく剣を鞘には収めない。緊張を持ったままネーゼの方を向く。しかし、それに気づいたネーゼは、リユートが口を開くより先に首を横に振った。

「私は、鏡の場所へ行きます」

しっかりとした口調でネーゼは答える。その金色の視線は、これまで以上に強く感じられた。その一方で、ネーゼの身体が震えているのが分かる。

「分かった。最後まで付き合おうよ」

その言葉と同時に、リユートは強く剣を握り締めた。

先ほど骸骨を退治した場所からさらに廊下を進んだ。

短い距離ではあったが、その間にも二、三回ほど亡霊に遭遇した。同行していた騎士達の力もあり、亡霊は無事に退治できた。また、時折見せるカープの剣技も貢献しており、一振り、二振り、三振りで正確に

骸骨の頭と銅を切断していく。

そして、ある部屋の前で騎士達が立ち止まる。二人の騎士は互いに頷き合い、そしてその部屋のドアを開いた。

飾り気のない部屋に数人の騎士達がいる。そして、その中の一人にリユートはその目を奪われた。

若い女性だからというわけではない。美しい容姿だからというわけでもない。他の騎士と比べて小柄ながらも、その人物は騎士団長オルト・シーザーと似た”空気”をまとっていた。

エレヴァ・クレシア。バリプレート聖騎士団が誇り、”天才”と噂される騎士である。

「お久しぶりです、カープ殿」

力強い声と共に、エレヴァは丁寧に礼をする。

「は、はい。お久しぶりです。いやあ、エレヴァさんに名前を覚えられるなんて。本当に光栄ですよ」

「私こそ、本日お会いできたことを嬉しく思います。そして、勇士の皆様。お初お目に掛かります。私はバリプレート聖騎士団所属、現在副団長を務めているエレヴァ・クレシアと申します」

エレヴァは再び頭を下げる。その行動一つ一つに気品を滲ませる。そして、一瞬たりとも隙を見せない。若くして騎士団の副団長というのも頷ける。

「それでは急ぎましょう。鏡はこの階段を降りた先にあります」

二人の騎士に代わり、エレヴァはリユート達を先導した。

#### 4 心の闇を映す鏡

薄暗い階段が続く。

騎士達があらかじめ灯しておいた壁際のロウソクの火、そして手に持たされたランタン。その他に何も灯りはない。まるで地獄への階段を彷彿させた。しかし、不思議なことに、亡霊達の屍はなくなっていた。

階段を降り、エレヴァはさらに先へと案内した。冷気の漂う廊下に静かな足音が響く。

不意にリユートの服が誰かに引っ張られる。そこにはリユートの服を掴むネーゼの姿があった。ネーゼの表情は怯えて見えた。しかし、それでもネーゼの視線は、先頭を行くエレヴァの背中から離れていなかった。

しばらくして、そのエレヴァの足音が止まる。

「この部屋です」

その部屋は金属製の頑丈そうな扉に護られていた。おそらく宝物庫か何かなのだろう。エレヴァは扉に手を掛ける。

金属の擦れる音が耳障り悪く響いた。それと同時に、扉がゆっくりと開く。

そして、暗闇に紛れながらも、”それ”は姿を現した。

リユート達は”それ”に近づく。人の背丈ほどはある鏡。その正楕円形の周りは、古風な木製の額縁によって飾られている。部屋の秀囲気の影響もあるのか、広い部屋の奥で眠るその鏡に、リユートは畏怖に近い感情を覚えた。

「さあ、早くその水を」

エレヴァの声が部屋に響く。その声に頷き、カープが鏡へと近づく。足音が響く。その時間が長く感じられる。

！？

何が起きたのかわからなかった。

気づくと、リユートは広大な闇の中に呑み込まれていた。その手に握るランタンの灯りは消えている。また、リユートの他には誰も見当たらない。ただその場に立っていることだけを認識できた。

静かであった。だが、心の中は穏やかではなかった。リユートの目の前に”ある人物”の背中が映る。

『リユートは殺させないっ！』

その人物はすぐに消える。そして、リユートは再び闇の中に一人残された。無意識のうちに、リユートはランタンからその手を離していた。代わりに、その手には剣が握られていた。

憎しみ。強い憎しみがあつた。

魔王が憎い。

護れなかった自分が憎い。

こんな世界が憎い。

剣を握る手に力が入る。そして、リユートは思いっきり剣を振り上げた。

しかし、その剣が降り下ろされることはなかった。何か強い力が

リユートを止める。次の瞬間、リユートの視界が白く輝く。その眩しい光に、リユートは思わず目を閉じた。

光が収まり、リユートはゆっくりと目を開く。その目の前にはネーゼの姿があった。さらに、その近くには、カープ、ハウク、アリス、エレヴァの姿も見える。

「正気に戻ったか？」

「あ、ああ……」

カープの声に返事をしながら、リユートは周囲を見渡す。まだ闇の中にいる。しかし、リユート達の周りはぼんやりとした光に包まれていた。

「ここはどこなんだ？」

「別に移動なんかしてないよ。ほら」

カープはある方向を指差す。その先には暗闇しか見えない。リユートは目を凝らす。はつきりではないが、そこに”鏡”が見えた。

「鏡の力だ。今までこんなことなかったんだけどな」

怪訝な表情でカープも鏡を見つめる。

「恐ろしい力です。何か……心の中の闇を映し出された、そのような感覚でした」

そのエレヴァの言葉に対して、ハウクが静かに頷く。

「心の闇か。あなたがち間違いではないだろう。あの鏡であれば、十分に考えられることだ」



「それにしても不思議ね。そんな状況からどうやって私達は助かっているの？」

「正直、私にも理解できない。この光。力はまるで」

そこでハウクの言葉が止まる。

その視線の先には鏡がある。周囲を包むおぼろげな光は、鏡から発生する闇の存在を明らかにする。その闇は、まるで意志を持つかのように、こちらへと集まり始める。

「何……なの、これは？」

アリスも驚きを隠せない。さらに、闇の中から呻き声のような音が聞こえ始める。

「これが亡霊の根源というわけですか」

冷や汗を流しながらも、エレヴァは静かに槍を構える。

そのエレヴァに呼応したのか、その闇が襲い掛かってくる。おぼろげな光が押し潰されそうになる。エレヴァは槍で闇を突く。同じくリユートとカープも剣を振る。しかし、形無き闇に対して、その全ては無力であった。

闇の中から聞こえる呻き声が大きくなっていく。そして、リユート達は闇に蝕まれ始める。その表情が苦悶で満たされる。その呻き声はリユート達の精神を削る。一瞬でも気を抜けば、そのまま心は闇へと呑み込まれてしまうだろう。しかし、耐えたところで、回避する手段がなければ同じこと。全滅は時間の問題であった。

いや、ただ一人だけ全く動じてない人物がいた。その人物はゆっくりと歩みを進める。そして、無言のままその闇に手を触れた。

眩い光。

それと同時に闇の一部が消滅する。

闇は包むことができなかった。そのたった一人の少女、ネーゼだけは包むことができなかった。

「これは私に任せてください」

ネーゼの声が聞こえた瞬間、リユート達は闇から解放された。唐突な出来事に、リユートは戸惑う。ネーゼの方を見ると、そのネーゼは再び闇に手を触れるところであった。さらに闇が消え、鏡まで続く淡い光の道ができる。

「カープ殿、今のうちです！」

エレヴァの声が大きく響く。それに反応したカープは、再び水を片手に駆け出した。栓を投げ捨て、一心不乱に鏡へと向かう。その間はわずか数秒。その”長い”時間をリユート達は緊張と共に見つめる。

そして、その水が鏡を伝う。

息を切らしながら、カープはその鏡を見る。そこには緊張するカープの顔が映っている。何も起きない。緊張がさらに強まる。ふと、何かに気づいたカープは目を凝らす。鏡越しに、先ほどの闇が小さくなっているのが分かる。

カープは慌てて振り向く。先ほど”襲い掛かってきた”闇は、周囲の闇に溶け込んでいく。呻き声も小さくなっていき、ついには聞こえなくなった。

「終わった……んだよね？」

カープは息を吐きながらそう漏らす。その肩の力が抜ける。

「はあ、今回は本当にやばかったなあ。これ、一人だと無理だったよ」

「そうだな。……だが、ネーゼシアンの方に助けられたか」

まだ残るおぼろげな光を見回した後、ハウクはネーゼを見る。一方のネーゼは黙っている。

「まあいいじゃないか。助かったんだしき。カミツテの民なんだし、ネーゼちゃんに不思議な力があってもおかしくないだろ？」

「……そうかもしれない」

ひとまずハウクはその追求をやめることにした。しかし、同じ”カミツテの民”であるハウクは、納得できないという表情を残している。

当のネーゼは、カープとハウクの会話を気にすることなく、鏡へ向かって歩き始めた。そして、その鏡の前で立ち止まる。

「……」

その鏡にはネーゼの姿が映っている。

ネーゼが何かを一言呟いた。そう見えた瞬間だった。ネーゼはさらに一步を踏み出した。

## 5 ネーゼと鏡

それは悲しみのせいなのだろう。

その鏡には、どこか寂しさをまとう少女の姿が映る。そして、その姿は少女にさらなる悲しみを与えた。

「今……戻ってきました」

ネーゼは小さな声で一言呟く。そして、無意識のうちに、さらに一步を踏み出していた。

鏡は何も返事をしない。ネーゼは静かに鏡を見つめる。そして、しばらくしてからその瞳を閉じた。

『……お母様……』

小さく呟き、少女は泣いた。周囲には大勢の人がいる。しかし、それを気にすることなく少女は泣いていた。まだ十歳にも満たない少女にとって、その悲しみは深かった。

その少女の背後に立っていた一人の男が少女の肩に手を置く。年齢は三十半ばくらいであろうか。その男の目にも涙があった。だが、男はその涙を拭い、そして少女を強く抱きしめた。

『ネーゼ』

『あああ。お母様が……。お父様、もうお母様には会えないのですか？』

『…………』

父親は何も言葉を返せない。ただネーゼの背中を強く優しく抱きしめるだけだった。心細かったのか、ネーゼもその腕を強く掴む。二人の腕は塞がれ、そしてその涙は遮られない。

それは、少女にとって、初めて悲しみを覚えた日であった。

『お父様、これはここに置いてもいいですか？』

『ああ。ありがとう、ネーゼ。重かっただろう？』

父親は笑顔で答えた。ネーゼは楽しそうに荷物を置く。

『ううん、大丈夫です』

そう返事をして、ネーゼも笑う。この笑顔には父親も助けられていた。

母親の死から二年が経ち、ネーゼは今年で十歳を迎えた。二人はこれまで母親の故郷で暮らしていた。しかし、父親の仕事の都合でしばらくこのカミツテで生活することになった。

父親は、今でも時々ネーゼが隠れて泣いていることを知っていた。だから、ネーゼの気分転換にもちょうどいいだろうと考えていた。

ここで、二人の新しい生活が始まった。

『お父様、お父様っ！ 今日、お友達ができました！』

『それはよかったじゃないか』

『あの……今度家に呼んでもいいですか？』

『もちろんだ。ネーゼの友達だ。駄目なわけがないだろう。今からでもいいぞ』

『お父様、ありがとうございます！』

満面の笑顔を見せ、ネーゼは部屋の奥へと走っていく。

『友達か。そういえば、向こうでは家の中でしか生活させてなかったからな』

父親は嬉しそうな表情でネーゼの部屋の方を見た。

『お父様、お友達を連れて来ました』

『そうか。いらっしやい。さあ、遠慮せずに上がりなさい』

ネーゼは二人の友達を連れて、そのまま奥の部屋へと入っていった。父親は微笑みながらお菓子の準備を始めた。

そして数年後。

『二人ともカミツテを出るらしいです』

『そうか。寂しくなるな』

『はい。でも、二人とも自分の目標に向かって進んでいます。だから、私は笑って見送ります。会えなくなるわけではないですし。…私も、負けていません』

ネーゼは笑顔であった。かつて母親の死に泣くことしかできなかった少女は、確かに強くなっていた。

さらに半年。事件は起きた。

父親が駆け付けたとき、ネーゼは放心状態であった。父親に気づき、ネーゼは小さく呟いた。

『お父様……』

『ネーゼ？』

異変に気づいた父親は、さらに近づこうとする。そのとき、ネーゼの後ろにある”何か”の存在に父親は気づいた。静寂と共に佇む”それ”を見て、父親は全てを悟る。そして、言葉を失った。

『私……』

ネーゼの言葉は続かない。代わりに涙が流れ、それが床に落ちる。

耳に聞こえないほどの小さな音。だが、父親にはそれがはつきりと聞こえた。聞き逃すはずがない。それは、大切な娘の悲しみの音。父親はもう一度”それ”を見つめる。そして、何かを決意した。

『大丈夫だ、ネーゼ。必ず助けてやる。必ず　！』

『嫌です……』

いつ以来だろう。少女にとっての久しぶりのわがまま。

母親の死に、父親も悲しんでいたのを知っていた。それを気遣い、これまで何一つわがままを言わなかった。二人で力を合わせてきた。しかし、それはここで終わる。

父親はネーゼの言葉を流した。聞こえなかったわけではない。強く握られた拳は震えていた。それでも、父親は話を続けなければならなかった。

『目が覚めたときには全て終わっている』  
『嫌ですっ！』

ネーゼは叫ぶ。そして、そのまま父親にしがみつく。父親は震えていた。涙を堪えていた。愛する娘を突き放す自分が辛かった。

『分かってくれ。これしかないのだ』

父親は震える声を絞り出し、ネーゼを抱きしめる。その強い力は、ネーゼへの深い愛情を表している。ネーゼもそのことは理解できて



いる。だから、涙が止まらない。しばらくの静寂の後、父親はネーゼの髪を撫でる。ネーゼは父親の顔を見る。父親は優しくネーゼに笑い掛けていた。

『幸せに生きてくれ、ネーゼ』

その言葉の後、ネーゼの意識は途切れた。いや、意識が途切れるその直前にもう一言だけ聞こえた。

『ありがとう、ネーゼ』

それは、少女にとって、二度目の悲しみを覚えた日であった。

「ネーゼ！」

その声にネーゼは我に返る。

「大丈夫か？」

リユートは心配そうにネーゼの顔を見つめる。

「……はい」

小さく返事をした後、ネーゼはもう一度鏡を見る。そして、何かを悟ったのか、ネーゼは鏡から目を離し、そしてゆっくりと背を向けた。

「リユート、ありがとうございます。もう……いいです。全て、分  
かりました」

「？」

リユートには、ネーゼの言葉の意味が分からなかった。だが、鏡  
に背を向けたネーゼが、何かに悲しんでいることだけは分かった。

「（これがネーゼの探していた鏡か）」

リユートは鏡を見つめる。

「（……？）」

リユートは不思議な気分だった。改めて見ると、不思議とその鏡  
を知っているような気がしてきた。しかし、リユートが千年遺跡を  
訪れるのは初めてであり、またこの鏡は少なくとも”千年”はこの  
場所に置かれていたはずだ。その鏡をリユートが知っているはずは  
ない。

「……」

リユートは何気なく鏡に手を伸ばす。そして、その手が鏡に触れ  
ようとする。

「駄目だ！」

大声を上げながら、カープが慌てて駆け付けて来る。

「どうしたんだ？」

「あ……いや。せつかく封印したんだしさ。衝撃でも与えて、またあんな亡霊が出たら嫌だろ？ 頼むから慎重に、な？」

そう言っつて、カープは両手を合わせる。カープの言葉に納得し、リユートはその手を引っ込めた。

ここでやるべきことは既に終わっており、もはや鏡にこだわる理由はなくなっていた。ここから魔王の手掛かりを得られるわけではない。リユートは鏡に背を向けた。

「皆様、この度のご協力に感謝いたします。バリプレートを代表して、この場でお礼申し上げます。さあ、バリプレートへ戻りましょう」

エレヴァに促され、リユート達は部屋を出た。

部屋を出る直前、ハウクはもう一度だけ鏡を見た。

「こんなことは一時しのぎに過ぎない」

淡い光に照らされたその鏡から目を離し、ハウクは小さく一言だけ呟いた。

「やはり魔王は現れている」

## 悪夢 小さな感謝

『私は生きてるよ』

レイラは笑った。怪我した右手を気にせず笑っていた。

その後ろには倒れている狼と、二人を見守る大柄の男が見える。リュートの目から涙が流れる。喉が小刻みに震えて声が出ない。

狼に遭った。死んでもいいと思った。誰かがいなくなる世界にいたくなかった。それでも、そんなリュートをレイラはかばった。

『大丈夫。みんなね、簡単にいなくなったりしないんだよ』

『でも……でも……さっきだって』

まだ泣くリュートをレイラは優しく抱きしめた。服が血で汚れた。でも、気にならなかった。伝わる温もりが心地よかった。

そして、レイラの胸から聞こえた。それは、生きているという音。

『だったら、リュートが私を護ってよ。そうすれば私はいなくならない。ずっと一緒だよ』

レイラがリュートの方を向く。二人の目が合う。リュートはまだ泣いていた。悲しいわけではないのに、その涙は止まらなかった。

その帰り道、二人は手をつないで歩いた。

そして、リュートは少し気恥ずかしそうに一言だけ小さく呟いた。

『ありがとう、”お姉ちゃん”』

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0583z/>

---

ツキを見て泣いたヒト

2012年1月11日00時51分発行